

松江市文化財調査報告書 第194集

市道福富10号線外2線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

福富松ノ前遺跡

令和2（2020）年3月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団



松江市文化財調査報告書 第194集

市道福富10号線外2線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

福富松ノ前遺跡

令和2（2020）年3月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例　　言

- 本書は、平成 29 年度に実施した、市道福富 10 号線外 2 線道路改良工事に伴う福富松ノ前遺跡の発掘調査報告書である。
- 本書で報告する発掘調査は、松江市長 松浦正敬（松江市都市整備部土木課）から松江市教育委員会が依頼を受けて現地調査を実施し、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が報告書作成を行った。
- 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

名　称　　福富松ノ前遺跡
所在地　　島根県松江市福富町 211-3 外 3 筆

- 現地調査の期間及び報告書作成期間

（現地調査） 平成 30 年 3 月 5 日～平成 30 年 3 月 14 日

（報告書作成） 令和元年 12 月 2 日～令和 2 年 2 月 28 日

- 開発面積及び調査面積

開発面積：約 300m²

調査面積：44.3m²

- 調査組織

【平成 29 年度】現地調査

主　体　者	松江市教育委員会	教　育　長	清　水　伸夫
実　施　者	松江市歴史まちづくり部	部　　長	藤原　亮彦
		次　　長（まちづくり文化財課長兼務）	永島　真吾
〃　まちづくり文化財課			
〃	〃　専門官（埋蔵文化財調査室長兼務）	飯塚　康行	
〃	〃　埋蔵文化財調査室　調査係　係　長	赤澤　秀則	
〃	〃　〃　〃　主　幹	川上　昭一（担当者）	
〃	〃　〃　〃　〃　主　任	青山　賢	
〃	〃　〃　〃　〃　主　任	落合　智之	
〃	〃　〃　〃　〃　学　芸　員	三宅　和子	
〃	〃　〃　〃　〃　嘱　託	小川真由美	
〃	〃　〃　〃　〃　嘱　託	金森みのり	
〃	〃　〃　〃　〃　嘱　託	高尾万里子	

【令和元（2019）年度】報告書作成業務

主 体 者	松江市	市 長	松浦 正敬
事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部 長	須山 敏之
	"	次 長	比田 誠
	"	"	稻田 信
	まちづくり文化財課	課 長	飯塚 康行
	" "	埋蔵文化財調査室 室 長	宮本 英樹
	" "	調査係 係 長	川上 昭一
	" "	学芸員 学芸員	三宅 和子
	" "	嘱託	門脇 誠也
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團	理 事 長	星野 芳伸
	埋蔵文化財課	課 長	赤澤 秀則
	" 調査係	主 任	江川 幸子（担当者）
	" 嘱託	託	北島 和子（補助員）

7. 本書に記載した遺物の洗浄・復元・実測・浄書、遺構図版の作成は以下の者が行った。
塩田陽子、周藤佳奈子、角優佳、坂本玲子
8. 繩文土器については、柳浦俊一氏（鳥取県埋蔵文化財調査センター嘱託）からご教示を賜った。
9. 動物の骨の鑑定は、石丸恵利子氏（広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門研究員）に依頼して、ご教示を賜り、報告文の校訂をいただいた。また、写真（図版7）のレイアウトについてもご教示を賜った。
10. 炭化米の年代測定は文化財調査コンサルタント株式会社に委託し、報告文を第4章に掲載した。
11. 本書の執筆及び編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て江川が行った。
12. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。
13. 本書における遺構ほかの記号は以下のとおりである。
NR：自然流路（土石流を含める） SX：性格不明遺構
14. 本書で掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮尺とスケールを明記した。
15. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市で保管している。
16. 土器編年については以下の書物を参考にした。
《突帯文土器》
濱田竜彦「山陰地方の突帯文土器と縄文時代終末期の様相」『中四国地域における晩期後葉の歴史像』2014年（本文中では濱田編年と記す）
《弥生土器》
松本岩雄「出雲・隱岐地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年山陽・山陰編』1992年（本文中では松本編年と記す）

目 次

例言

第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境.....	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の報告.....	7
第1節 調査の概要	7
第2節 基本層序.....	11
第3節 自然地形.....	11
第4節 遺物	13
第4章 自然科学分析	29
福富松ノ前遺跡における AMS 年代測定 渡辺正巳（文化財コンサルタント株式会社）	
第5章 総括.....	32
遺物観察表.....	36
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第 1 図	開発範囲と調査範囲.....	2
第 2 図	島根・松江市と福富松ノ前遺跡.....	3
第 3 図	福富松ノ前遺跡位置図（空中写真）.....	3
第 4 図	中海・宍道湖地域の縄文時代古地形（中村唯史 2014）.....	4
第 5 図	福富松ノ前遺跡と周辺の遺跡（S=1 : 25,000）.....	5
第 6 図	福富松ノ前遺跡位置図（S=1 : 5,000）.....	6
第 7 図	調査区位置図（S=1 : 1,000）.....	8
第 8 図	調査成果図（S=1 : 50）.....	9
第 9 図	調査区平面・セクション図（S=1 : 60）.....	10
第 10 図	SX04 平面・セクション図（S=1 : 40）.....	12
第 11 図	NRO2 出土遺物（S=1 : 3）.....	13
第 12 図	NRO3 出土遺物（1）（S=1 : 3）.....	14
第 13 図	NRO3 出土遺物（2）（S=1 : 3）.....	15
第 14 図	NRO3 出土遺物（3）（S=1 : 3）.....	16
第 15 図	NRO3 出土遺物（4）（S=1 : 3）.....	17
第 16 図	NRO3 出土遺物（5）（S=1 : 3）.....	18
第 17 図	NRO3 出土遺物（6）（S=1 : 3）.....	19
第 18 図	NRO3 出土遺物（7）（S=1 : 3）.....	20
第 19 図	NRO3 出土遺物（8）（S=1 : 3）.....	21
第 20 図	NRO3 出土遺物（9）（S=1 : 1）.....	23
第 21 図	出土地点不明遺物（1）（S=1 : 3）.....	26
第 22 図	出土地点不明遺物（2）（S=1 : 3）.....	27
第 23 図	調査区平面図.....	29
第 24 図	調査区断面図.....	29
第 25 図	曆年較正結果.....	30
第 26 図	曆年較正結果の分析.....	30

挿表目次

第 1 表	年代測定結果.....	30
第 2 表	松江市で出土した炭化米の AMS 法による年代一覧.....	34
第 3 表	遺物観察表.....	36

本文中写真目次

写 真 1	福富松ノ前遺跡空中写真（1947 年）.....	1
写 真 2	掘削作業風景.....	7
写 真 3	掘削作業風景.....	7
写 真 4	畦の土砂採取作業風景.....	7
写 真 5	土砂水洗作業風景.....	7
写 真 6	分析試料の炭化米顕微鏡写真.....	31

写真図版目次

図版 1 上	調査地遠景（南東から）
図版 1 下	調査地全景（調査前）（北東から）
図版 2 上	完掘状況（南から）
図版 2 下	完掘状況（南西から）
図版 3 上	南壁セクション東半分（北から）
図版 3 下	南壁セクション西半分（北から）
図版 4 上	NRO3 検出状況（北東から）
図版 4 下	NRO3 土層状況（北から）
図版 5 上	NRO3 土層断面（北から）
図版 5 下	NRO3 遺物出土状況（第 13 図 11）（北から）
図版 6 上	畦から出土した黒曜石の剥片（一部）
図版 6 下	畦から出土した安山岩の剥片（一部）
図版 7 上	動物遺存体
図版 7 下（右）	動物遺存体（タイ科の歯（臼齒））
図版 7 下（左）	動物遺存体（タイ科の歯）
図版 8 上	植物遺存体
図版 8 下	炭化米
図版 9 ~ 18	出土遺物①~⑩

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

福富町地区は狭隘な道路が多く、車両のすれ違いや非常時の緊急車両の通行等に支障を来すなど、基盤整備の遅れが特に顕著な地区である。このような現状を改善するため、松江市では、国による大橋川改修事業に併せ、地域の幹線道路と地区内道路を整備することで生活環境の向上を図るとともに、災害等の非常時の確実な通行を確保することとした。

この事業に先立ち、土第449号より平成29年12月14日付で、市道福富10号線外2線道路改良工事予定地内における埋蔵文化財の分布・試掘・確認調査についての依頼を受け、平成29年12月25日、補助事業により試掘調査を実施した。開発予定地内に1.5×3.0mトレンチを設定して重機で掘り下げを行ったところ、性格不明の落ち込みSX01(現:SX04)を検出しサブトレンチを設定して掘り下げたところ、縄文土器多数が出土した。遺構の完掘は行わず、発生土で埋め戻しを行い調査を終了した。



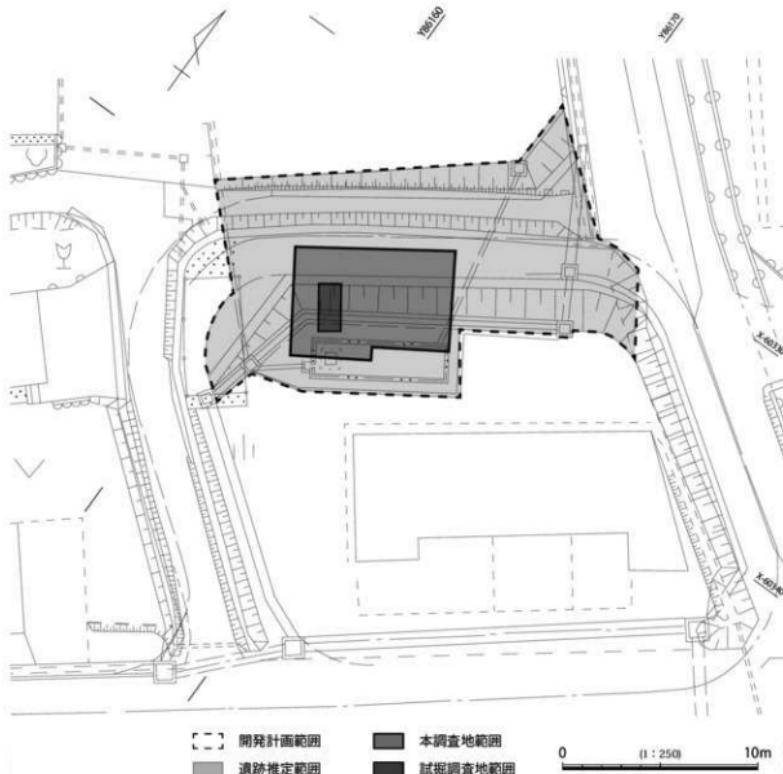
写真1 福富松ノ前遺跡空中写真(1947年)

また、平成29年12月28日、土地所有者が複数のため、松江市教育委員会教育長から遺跡発見通知を提出し、遺跡名は当地の地名と字名をとって「福富松ノ前遺跡」とした。

この結果を受けて、平成30年1月4日、文化財保護法に基づいて事業者から遺跡発見の通知が市埋蔵文化財調査室を通じて島根県教育委員会宛てに進達された。これに対し、平成30年1月25日、島根県教育委員会から、工事着手前に本調査を実施するよう勧告があり、事業者に伝達した。

この後、事業者より本発掘調査の依頼書が提出され、平成30年2月28日に埋蔵文化財発掘調査の通知を行い、平成30年3月5日から市直営で本調査を実施した。

なお、報告書作成については、令和元年度に公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団に委託して実施することとなった。



第1図 開発範囲と調査範囲

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

東西に細長い島根県の北東部には、東西長65kmの島根半島がある。島根半島は北を日本海、東を美保湾、南を宍道湖と大橋川、中海に囲まれ、西の出雲市で本土とつながり、日本海の北約50kmに隠岐の島が浮かぶ。

松江市は島根半島の東側約半分と、これとほぼ同じ面積の本土側の土地を合わせ持ち、福富松ノ前遺跡は島根半島と本土を隔てる大橋川の東の端に近い島根半島側、福富町に位置している。

本遺跡は、標高114.1mの独立丘の南東方向に派生する小支谷の出口部分にあたる小規模な扇状地の扇端付近にあり、谷の最上部には堤が造られて谷水田が営まれ、水田は南東に向かって徐々に標高を減じ、本遺跡の南から大橋川まで整然とした水田が広がっている(第4・5図)。

外海、日本海と弓ヶ浜半島により隔絶された中海は汽水湖で、波が穏やかである。



第2図 島根・松江市と福富松ノ前遺跡



第3図 福富松ノ前遺跡位置図(空中写真)

第2節 歴史的環境

1. 古地形と遺跡の分布

縄文海進極大期は7,000年前頃で、当時の島根半島は本土と切り離された島であった。その後は神戸川や斐伊川河口でデルタが徐々に発達して陸地化が進み、現在の宍道湖及び中海の前身が出来上がったようであ 第4図 中海・宍道湖地域の縄文時代古地形 (中村唯史 2014)。縄文時代の遺跡はその時期の内海縁辺部に多く分布する傾向がある。松江市近郊では嵩山・和久羅山山塊の西に宍道湖から入り込む松江湾入(A)があり、そこではタテチョウ遺跡や西川津遺跡といった大規模な遺跡が分布している。また、浜佐田湾入(B)は日本海からの入江にも通じており、その周辺には佐太講武貝塚などが分布している(第4図)。



2. 福富松ノ前遺跡周辺の遺跡

中海沿岸ではこれまで多くの縄文時代の遺跡が知られていたが、大橋川縁辺部は空白地帯であった。しかし、近年の大橋川拡幅に関連する大規模な工事に伴い発掘調査が進められてきた結果、中海と宍道湖を結ぶ大橋川縁辺部でも縄文時代の遺跡の発見が相次いでいる。地形からみて、嵩山・和久羅山塊の裾部には多くの縄文時代の遺跡が存在する可能性が高い。

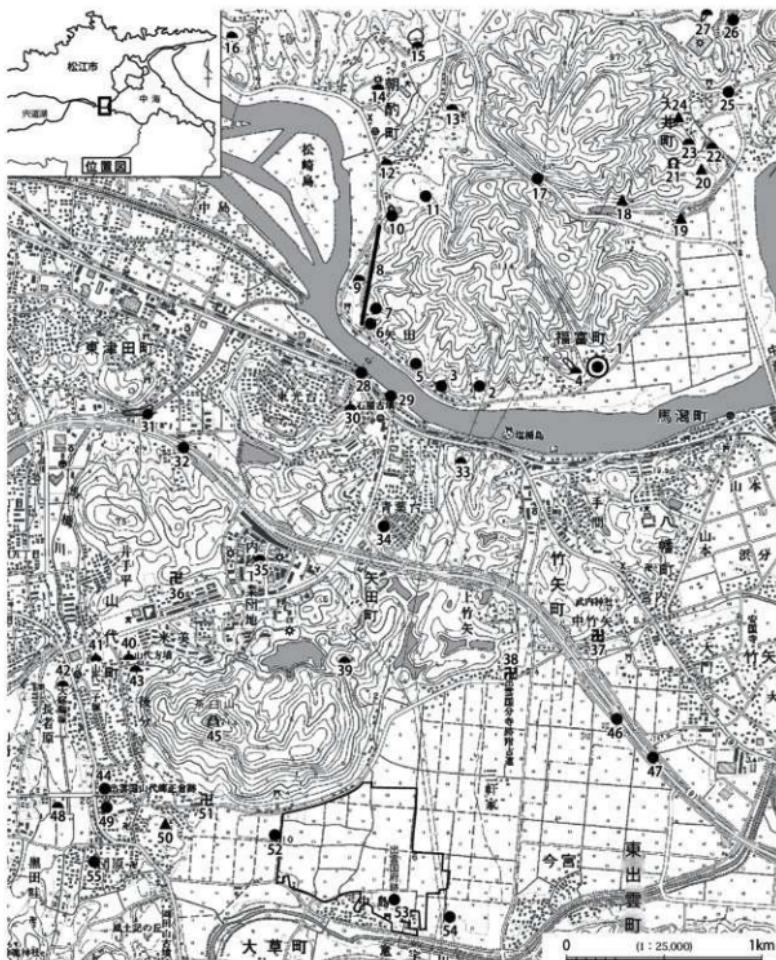
以下では、本遺跡を中心として各時代の遺跡について述べる。

縄文時代 朝酌菖蒲谷遺跡(6)の低地部で中期～後期初頭の堅果類の貯蔵穴1基、大井町の九日田遺跡(25)で後期初頭を中心とした堅果類の貯蔵穴19基を含む計23基の土坑が検出されており、シコノ谷遺跡(2)では早～晚期の多量の遺物、朝酌矢田遺跡(3)では縄文前期中葉の土器が1点、若宮谷遺跡(5)では晚期の土器が若干出土している。

大橋川南岸では、官道下遺跡(28)の自然流路跡から後～晚期を中心とする土器が出土している。また、石台遺跡(31)では土坑から耦殼圧痕の付いた晚期土器や石器がまとまって出土し、勝負遺跡(32)では後期の住居跡が検出されている。

弥生時代 近くでは、九日田遺跡から前期の土器が少量出土しているが、この時期になると広い平野のある意宇平野縁辺に規模の大きい布田遺跡(46)がみられる。中期では大坪遺跡(52)で竪穴建物跡が検出されている。後期に入ると魚見塚古墳(9)の墳裾から竪穴建物跡が検出されており、キコロジ遺跡(10)から少量の土器が出土している。

古墳時代 前期では朝酌菖蒲谷遺跡で土器棺墓と方墳の周溝状の溝が検出されている。中期に入ると宍道湖縁辺部に規模の大きい古墳が一定の間隔を保って築かれるようになり、その一環として朝酌川沿いに親音山古墳群(16)、石屋古墳(30)などの古墳が築かれている。後期に入ると茶臼山の西麓に大庭鶴塚古墳(42)や、山代二子塚古墳(41)、山代方墳(40)、山代原古墳(永久宅後古墳)(43)といった規模の大きな古墳が集中して築かれ、出雲統一の動きがみられる。隣接する朝酌町では全長



- | | | | | |
|-----------|---------------|---------------|------------------|---------------|
| 1 福富松ノ前遺跡 | 12 畠野岩屋古墳 | 23 大井古墳群 | 34 園内越畠群 | 45 清田山城跡 |
| 2 シコノ谷遺跡 | 13 畠野上神社跡古墳 | 24 寺尾跡 | 35 高美墳墓 | 46 有田遺跡 |
| 3 創的大田遺跡 | 14 旧御市小学校校庭古墳 | 25 久田道跡 | 36 山代郡分新造附跡 | 47 夫敷遺跡 |
| 4 阿介村古墳 | 15 畠野古墳群 | 26 池ノ原C道跡 | 37 清国寺紀伊寺跡 | 48 東羽守寺遺跡 |
| 5 若宮古道跡 | 16 畠野古墳群 | 27 イガラビ道跡・古墳群 | 38 清国寺今寺跡 | 49 下黒田遺跡・美庄遺跡 |
| 6 利助島塚古道跡 | 17 畠野B道跡 | 28 宮道下道跡 | 39 田川1号墳 | 50 山代郡新新造町瓦塚群 |
| 7 利助塚・石塚跡 | 18 畠野宮跡 | 29 畠道跡 | 40 畠山方墳 | 51 山代郡新新造附跡 |
| 8 魚見塚古道跡 | 19 /引ヶ宮跡 | 30 石塚古墳 | 41 畠山二子塚古墳 | 52 大津遺跡 |
| 9 魚見塚古墳 | 20 斎平御跡 | 31 石塚遺跡 | 42 大庭跡古墳 | 53 出雲御跡 |
| 10 キコロジ遺跡 | 21 弥平横穴群 | 32 畠野遺跡 | 43 山代跡古墳（永久宅後古墳） | 54 大屋敷遺跡 |
| 11 天井遺跡 | 22 山塚古墳 | 33 手間古墳 | 44 山代跡古墳 | 55 美庄用道跡 |

第5図 福富松ノ前遺跡と周辺の遺跡 (S=1:25,000)

61mの前方後円墳、魚見塚古墳が築造されて小規模な古墳も多く築かれているが、福富町周辺では福富松ノ前遺跡（1）の西にある丘陵で阿弥陀寺古墳（4）がみられる程度である。

一方、福富町の北東に隣接する大井町では5世紀末には廻谷窯跡（20）で須恵器生産が開始されて9世紀まで継続しており、その内の6～8世紀の間は出雲国内での須恵器生産を独占している。窯跡には寺尾窯跡（24）、ババタケ窯跡（19）、岩汐窯跡（18）などがあり、須恵器工人に関連する遺跡としては池ノ奥C遺跡（26）、山巻古墳（22）などが考えられている。

古代 出雲国では7世紀末には意宇平野に国庁（出雲国府跡・53）が設置され、魚見塚遺跡（8）では国庁北の十字路から発して隱岐国へ向かう官道跡（枉北道）が検出された。その沿線にあるキコロジ遺跡では9世紀までの遺物が多く出土している。

【第2章 参考文献】

中村唯史 2014 「6. 繩文時代の島根県の古地形と三瓶火山の活動の影響」島根県古代文化センター『古代文化センター研究論集第13集 山陰地方の縄文社会』

【第2章 図】

第4図 Tokuoka , T., Takayasu , K., Kunii,H ., Takehiro, and Sampei,Y1998 : Improving improving lagoonal environments for future generations-a case study of Lakes Nakumi and Shinji , Japan . LAGUNA. (汽水域研究) , 5 , I-X . の竹広原図をもとに作成した。



第6図 福富松ノ前遺跡位置図 (5=1:5,000)

第3章 調査の報告

第1節 調査の概要

福富松ノ前遺跡の現況は盛土造成された宅地で、標高 3.2m である。丘陵に挟まれた小さな谷の出口にあたり、1947 年の空中写真では水田として利用されている。

本遺跡の発掘調査は、平成 30 年 3 月 5 ~ 14 日の間、8 日間を要して実施した（写真 2 ~ 5）。調査はまず無遺物層（第 9 図 1 ~ 8 層）までを重機で除去し、その後に人力で掘削を行った。遺物は土層ごとの取り上げとし、主要なものについては出土地点と標高を付記している。

調査の結果、当調査区の地山直上では、2 本の土石流の跡（NRO1、NRO2）と流路（NRO3）、性格不明の落ち込み（SX04）1 ケ所を確認した。

遺物は、NRO2 と NRO3 から縄文時代後期～弥生時代前期の土器、石製品が出土した。なお、NRO3 の埋土については竹ベラなどで慎重に遺物の採取を行ったにもかかわらず、雨に洗われるとな遺物が採取できる状況であった。試験的に埋土の洗浄を行ったところ、土器の小片に混じって緑色凝灰岩製の管玉や黒曜石の細片、炭化米が多数出土した。埋土全ての水洗いは不可能であったが、土層観察用の鞋について微細遺物採取のため土砂の水洗を行った。その結果、石器製作に伴う微細剥片多数のほか、動植物遺存体を採取することができた。このうち、炭化米については AMS 法による年代測



写真 2 挖削作業風景



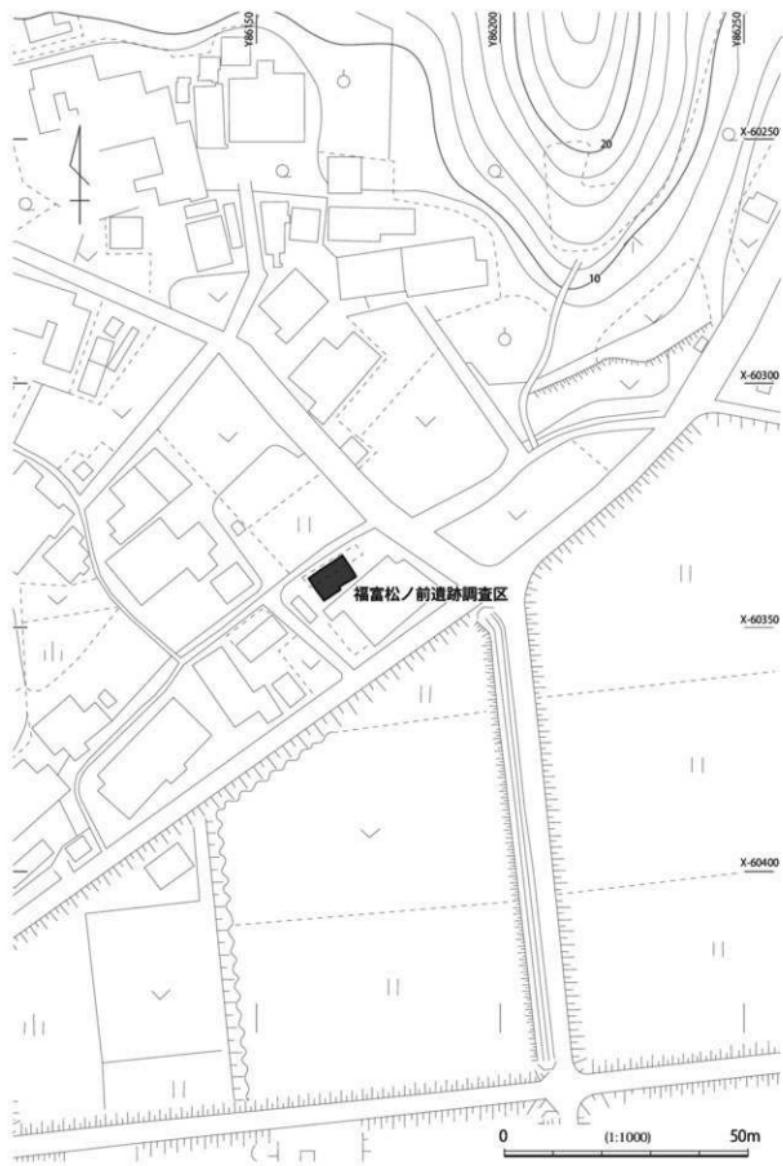
写真 3 挖削作業風景



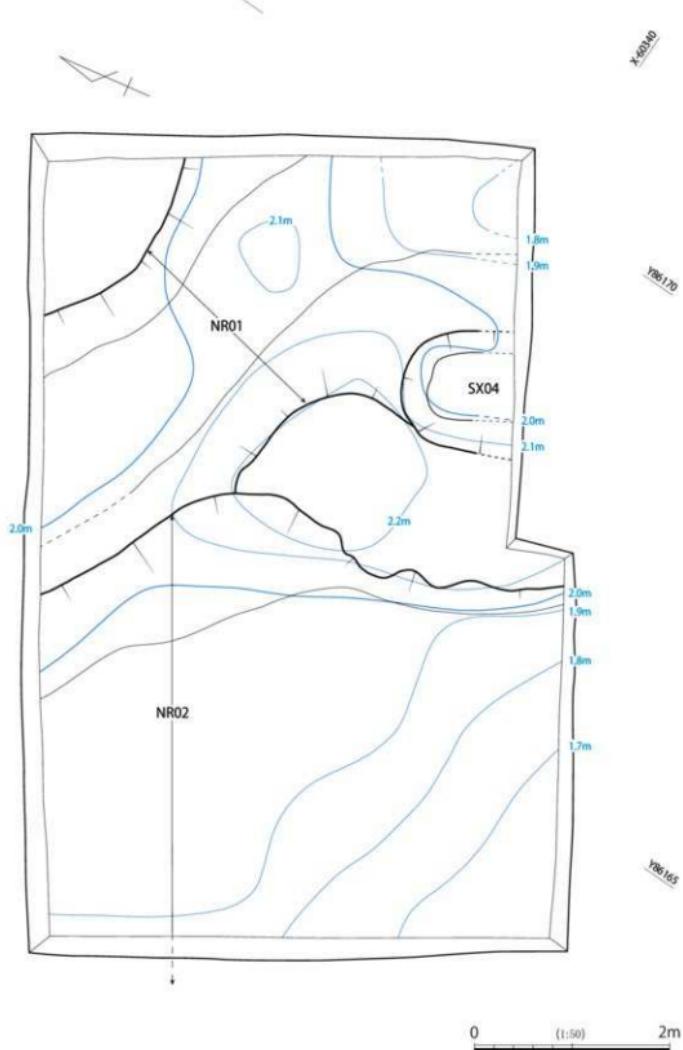
写真 4 砂の土砂採取作業風景



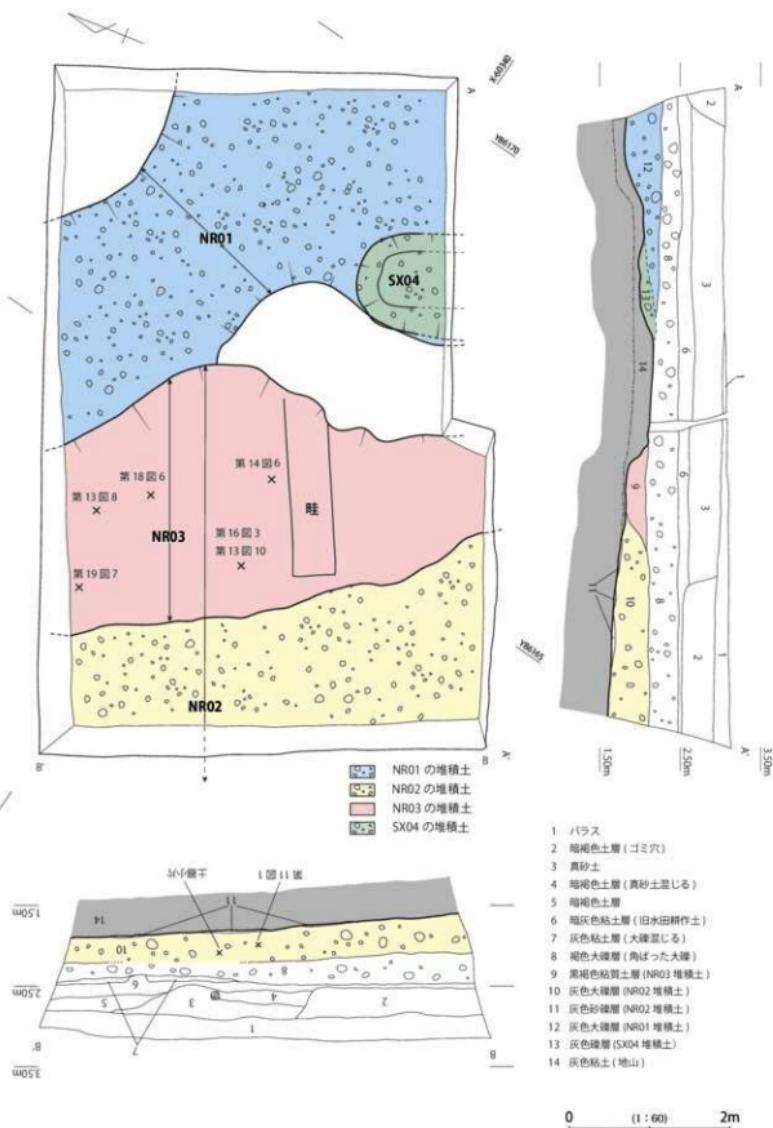
写真 5 土砂水洗作業風景



第7図 調査区位置図 ($S = 1:1,000$)



第8図 調査成果図 (S=1:50)



定を行い、成果を第4章に掲載している。

本遺跡では、縄文土器片がコンテナ6箱分、弥生土器片がコンテナ1箱分、石製品がコンテナ1箱分、陶磁器片が13点、動植物遺存体がコンテナ半箱分出土した。^{注2}

第2節 基本層序

本遺跡は本来は南東に下がる谷の出口にあたる緩傾斜面に位置し、北西が高くて南西が低い。

調査前には盛土造成が行われており標高3.08～3.14mの平坦地に均されていたが、1947年頃には水田として利用されており、当時の標高は2.6mである。^{注3}

基本層序は、上から現代の客土（第9図1～5層）、造成前の水田耕作上層（第9図6層）、調査区全体を覆う時期不明の土石流（第9図7、8層）があり、その下には地山（第9図14層）を削り込んだ土石流NRO1（第9図12層）とNRO2（第9図10、11層）と流路NRO3（第9図9層）がみられた。

NRO1～NRO3は切り合が明瞭で、（古）NRO1→NRO2→NRO3（新）である。

遺物は、摩耗した須恵器の破片や近世～現代の陶磁器が表採された。また、第9図10、11層から縄文時代晚期～弥生時代前期の土器が少量出土し、第9図9層からは縄文時代後期～弥生時代前期の土器や石製品が多量に出土したほか、自然遺物が出土している。

第3節 自然地形

地山面で、2本の土石流（NRO1、NRO2）と流路（NRO3）、性格不明の落ち込み（SX04）1ヶ所を検出した（第8～10図）。以下で説明を行う。

(1) NRO1 地山を西から東に向けて削り込んだ土石流である。堆積土は灰色大礫層1層で一度に埋まった状況を呈している。右岸から立木2本が土石流により押し倒された状況で出土した。遺物は出土していない。

(2) NRO2 地山を北西から南に向けて削り込んだ土石流である。堆積土は下から灰色砂礫層（第9図11層）、灰色大砂礫層（第9図10層）である。

遺物は灰色砂礫層と灰色大砂礫層から、縄文時代晚期～弥生時代前期の土器と石器が少量出土している。

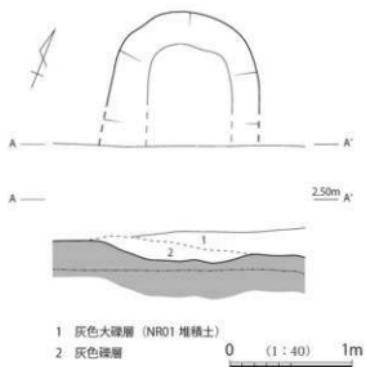
(3) NRO3 NRO2の最終段階の流路と考えられ、幅1.3～3.1m、検出時の深さ15～20cmを測る。

畦と東壁で断面を観察したところ埋土は砂礫を含む黒褐色粘質土層1層で、ラミナが見られなかった。最終的には、湿地のような状況であったと思われる。

堆積層には縄文時代後期の土器がわずかに混じり、縄文時代晚期後半～弥生時代前期前半の土器が大量に出土している。堆積層を水洗した結果、緑色凝灰岩製の管玉1点と黒曜石製の石鏃2点との剥片、安山岩製の石鏃3点とその剥片のほか、動物や魚類の歯や骨、炭化米や種子類などの動植物遺存体が出土した。

(4) SX04 (第10図)

NR01 下の地山面で検出した。検出時の平面プランは東西長 1.3m 程度で、調査区南壁で土屑を観察すると、最大深 16cm が残存する。下端は長径が南壁にかかるが約 1m 程度、幅 0.7m と推測され、埋土は灰色礫層 1 層で若干の有機質（木の小枝等）が混入している。遺物は出土していない。性格については明確でないが、埋土が上層の灰色大礫層とほぼ等しいことから、倒木などによる自然発生的な形成原因が考えられる。^{注4}



第10図 SX04 平面・セクション図 (S=1:40)

第4節 遺物

表掲した須恵器等の破片は、風化した小片のため図化は行っていない。

NR02 から少量の縄文時代晚期～弥生時代前期の土器片と石製品が出土しており、第 11 図に掲載する。また、NR03 から縄文時代後期～弥生時代前期の多量の土器片と石製品が出土したので第 12 ～ 20 図で掲載し、動植物遺存体については簡単な報告を行い、図版 7、8 に写真を掲載する。

上記のほか、出土地点不明の土器、石製品があり、第 21、22 図に掲載する。

1. NR02 出土遺物（第 11 図）

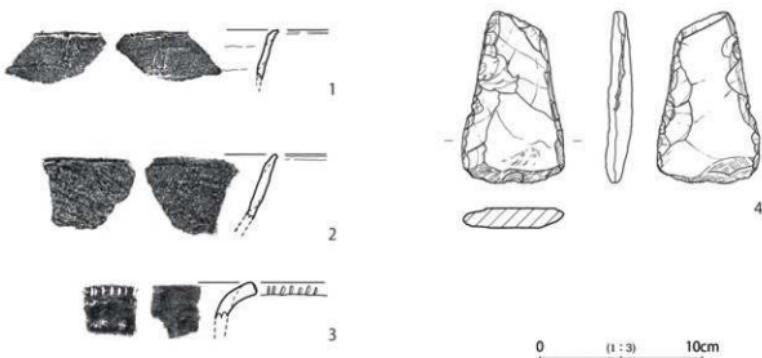
第 9 図 10、11 層から出土した遺物で、量は少ない。縄文時代晚期～弥生時代前期の土器、石製品が出土している。

(1) 土器

第 11 図 1、2 は縄文時代の粗製深鉢の口縁端部である。1 は胎土に金雲母を含む。内外面とも凹凸の少ないナデ調整で、器壁が薄い。外面には煤が付着している。2 は内外面とも 3 ～ 5mm 幅のナデで、外面は斜方向、内面は横方向に施されている。調整原体は中央部がやや深い匙状である。第 11 図 3 は弥生時代前期の甕である。如意型口縁の端部の小さな破片であるが、内外面とも滑らかな横ナデで調整され、口唇外面には刻目が施されている。

(2) 石製品

第 11 図 4 は安山岩製の石斧で、側面が軽く研磨され、刃部は両面から研磨された、一部磨製の打製石斧である。縦 10.5cm、最大幅 6.5cm、最大厚 1.2cm、重量 121.1g。



第 11 図 NR02 出土遺物 (S=1:3)

2. NR03 出土遺物 (第 12 ~ 20 図)

第 9 図 9 層から出土した遺物で、調査区内では最も土器の出土数が多い。縄文時代後期～弥生時代前期の土器や石器のほか、石器製作時の押圧技法で発生した黒曜石やサヌカイトの微小剝片も高い密度で出土している。また、骨類や炭化米、木の実などの動植物遺存体が出土している。

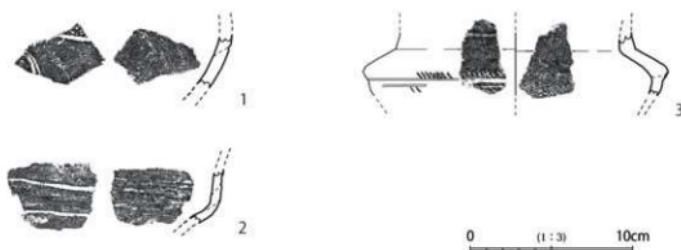
(1) 土器 (第 12 ~ 19 図)

第 12 図 1 ~ 3 は縄文時代後期の土器である。第 12 図 1 は磨消縄文の小片で、全体にローリングを受けて丸味を帯びている。福田 K2 式に対応すると思われる。2 は外面がよく磨かれて横方向に 2 条の沈線が引かれている。3 は 2 つの破片から復元した、注口土器の頸～肩部付近と思われる。頸部に 1 条、肩部に 2 条の沈線が廻らされ、肩部の沈線の上下には斜方向の刻目が施されている。刻目の深部に赤色顔料が残ることから、本来は外面全面に赤色顔料が塗布されていたと思われる。

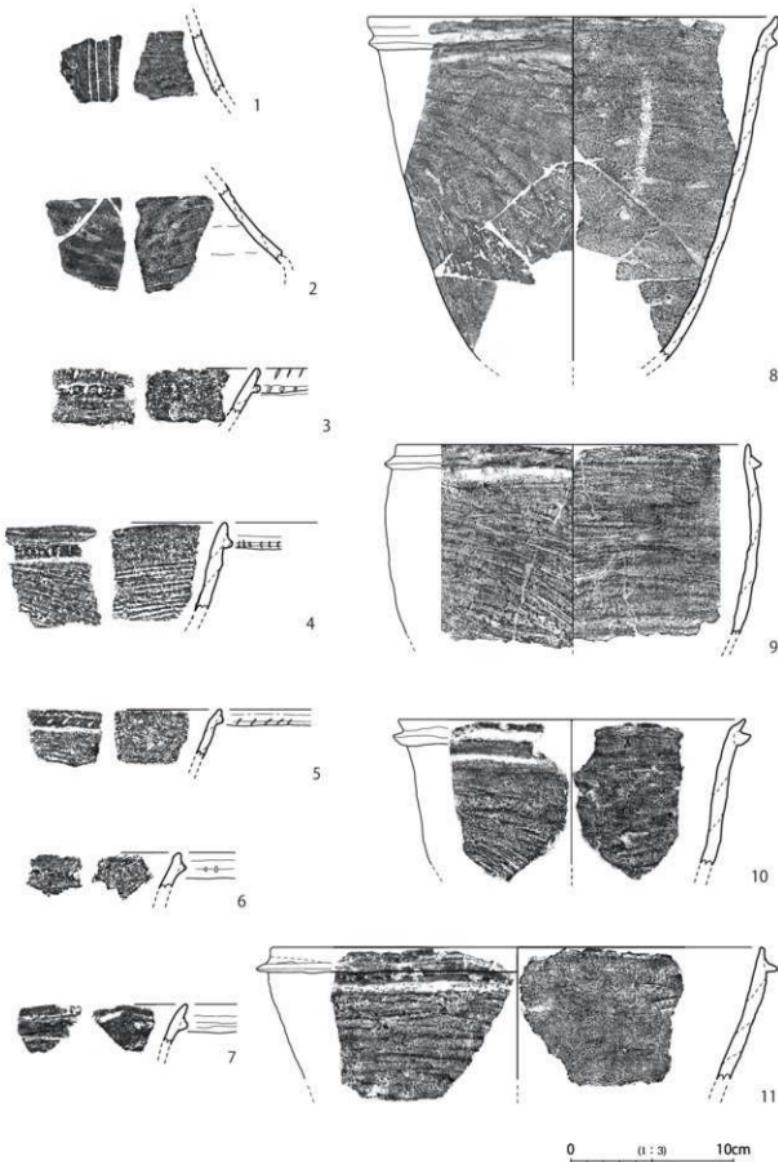
第 13 ~ 18 図は縄文時代晩期後半の土器である。

第 13 図 1、2 は肩部から口縁が内傾する、突帯文土器の深鉢である。1 は頸部で、ミガキの上に草を半裁したような原体により 2 本 1 単位で上下方向の沈線が引かれている。2 も頸部で、ミガキの上に連弧文もしくは山形の文様が描かれ、肩部に 1 条の沈線が廻らされている。

第 13 図 3 ~ 11 は突帯文土器の深鉢である。3 は口縁下 1cm に細い突帯が貼り付けられ、口唇から突帯にかけて一度に刻目が施されている。刻目は放射筋の目立たない二枚貝で施されており、若干のカーブがみられる。4 は外面が斜方向のケズリ、内面が横方向のサルボウタイプの二枚貝復縫による条痕である。口縁下 1cm 弱に突帯が貼り付けられ、刻目が施されている。5 は口縁下 3mm に細い突帯が貼り付けられ、刻目が施されている。刻目は放射筋の目立たない二枚貝で施されており、若干のカーブがみられる。6 は口縁下 5mm に突帯が貼り付けられて、刻目が施されているようだが、器而剥離のため明瞭でない。7 は口縁下 7mm に突帯が貼り付けられている。8 は口縁がやや外反する器形で、外面は斜方向のケズリ、口縁周辺はケズリ後ミガキで、調整原体は中央部がやや深い匙状である。内面は横方向のナデ調整である。口縁下 1cm に断面三角形の突帯が貼り付けられている。口径 25.4cm。9 は口縁が直立して体部が若干張るもので、外面は斜方向のケズリ、内面は横方向のナデ調整である。



第 12 図 NR03 出土遺物 (1) (S=1:3)

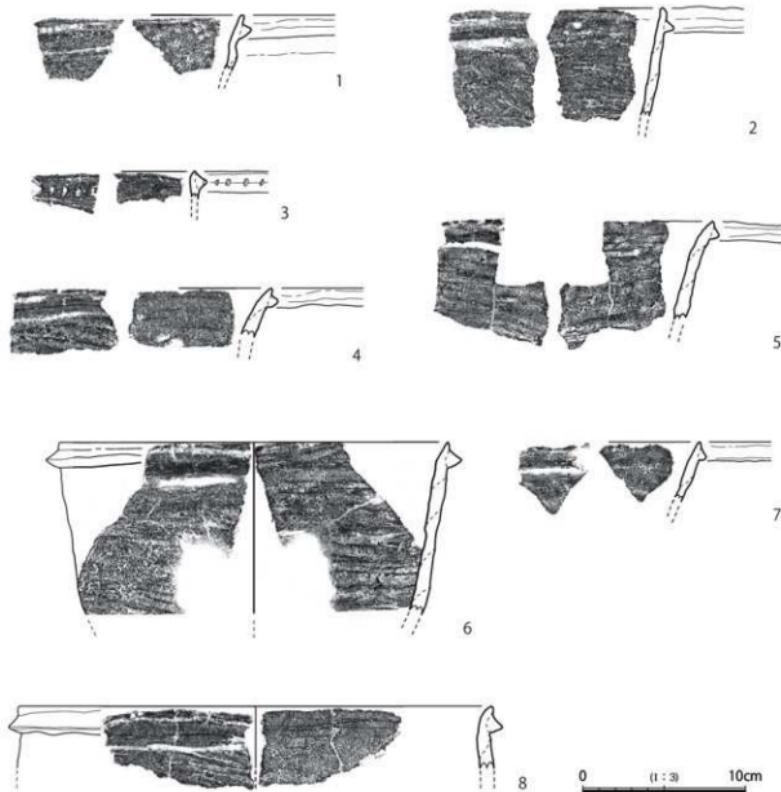


第13図 NR03出土遺物(2) (S=1:3)

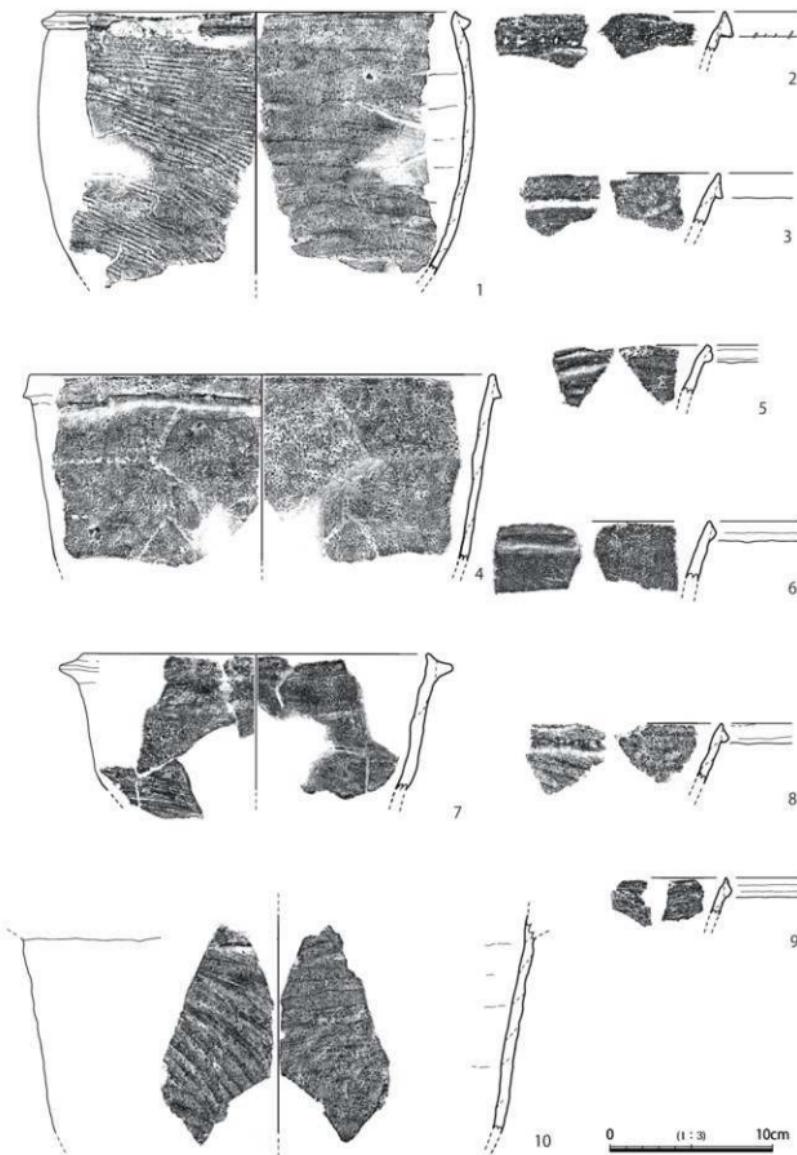
調整原体は8と同様に中央部がやや深い匙状である。口縁下5mmに突帶が貼り付けられている。外面下方は被熱により橙色を帯びている。口径21.9cm。10は口縁端部が外反する器形で、外面は斜方向にら肋痕状の細かい筋が観察でき卷貝条痕の可能性があるもの、内面は横方向の条痕後ナデである。口縁下6mmに貼り付けられた突帶は下方から押さえつけられている。口径21.5cm。11は外面は幅6mm単位の匙状原体を横方向にナデつけており、内面は横方向のミガキに近いナデ調整である。口縁下7mmに幅が狭く高さのある突帶が貼り付けられている。

第14図も突帶文土器の深鉢である。

第14図1は口縁が若干外反する器形で、口縁下4mmに貼り付けられた突帶は下からもしっかりと



第14図 NR03出土遺物(3) (S=1:3)

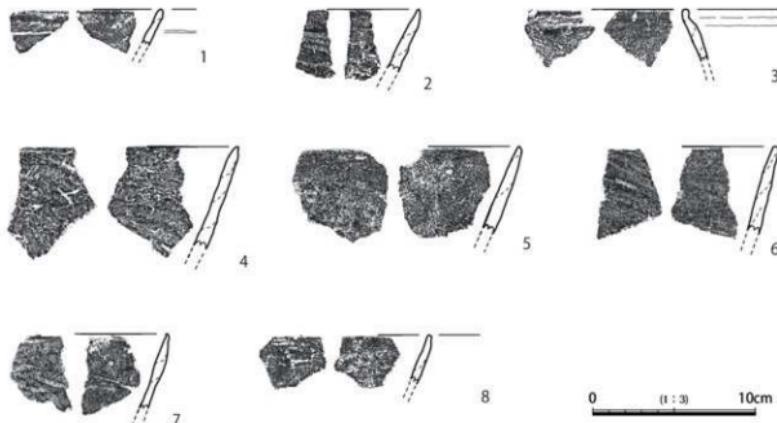


第15図 NR03出土遺物(4) (S=1:3)

押さえられている。2は口縁が直立する器形で、外面は斜方向のケズリ、内面は横方向のケズリで、ケズリの原体は中央部がやや深い匙状である。口縁下5mmに突帯が貼り付けられている。3は口縁直下に突帯が貼り付けられ、浅い刻目が施されている。4は外面は斜方向のケズリ、内面は横方向のナデ調整で、調整原体は中央部がやや深い匙状である。ほぼ口縁直下に突帯が貼り付けられている。5は外面は横方向のケズリ、内面は横方向のナデ調整である。口縁直下に突帯が貼り付けられている。6は外面は斜方向のケズリ、内面は横方向のナデ調整で、調整原体は中央部がやや深い匙状である。ハマグリタイプの二枚貝腹線の圧痕がみられることから、これが調整原体かもしれない。突帯は口縁直下に貼り付けられているが、蛇行が著しい。口径24.6cm。7は口縁直下に突帯が貼り付けられている。8は内外面ともミガキ状の調整で、器面は滑らかである。ほぼ口縁直下に突帯が貼り付けられている。口径29.3cm。

第15図は突帯文土器の深鉢である。

第15図1はやや胴が張る器形で、外面はサルボウタイプの二枚貝条痕、内面は横方向のナデ調整で、調整原体は中央部がやや深い匙状である。口縁直下に突帯が貼り付けられている。口径24.6cm。2は内外面とも横方向のナデ調整で、口縁端部に突帯が貼り付けられ、浅い刻目が施されている。3は風化のため内外面とも器面調整は不明である。口縁端部に突帯が貼り付けられている。4は内外面とも横方向のナデ調整が施されているようだが、風化のため明瞭でない。口縁端部に突帯が貼り付けられている。口径28.3cm。5は口縁直下に突帯が貼り付けられたものである。6は内外面とも滑らかなナデ調整が施され、口縁端部に突帯が貼り付けられている。7は外面は横方向の巻貝条痕、内面は横方向のナデ調整で、口縁端部に高さのある突帯が貼り付けられている。口径21.2cm。8は外面



第16図 NR03出土遺物(5) (5=1:3)

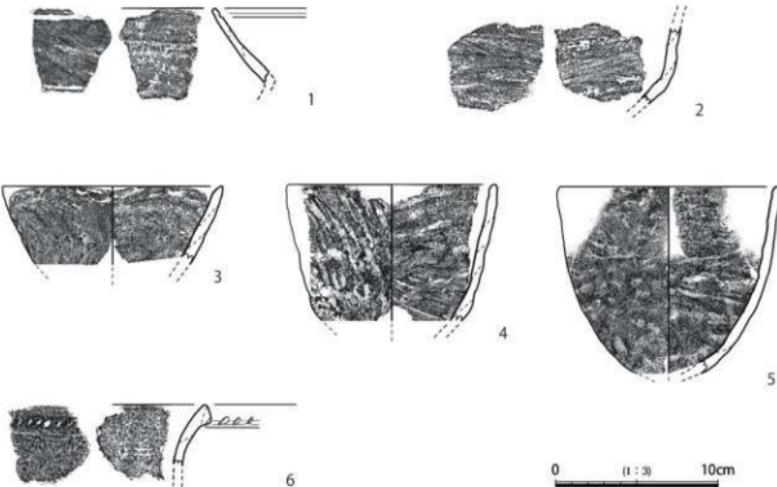
は1単位の幅が1cm以下のナデ上げ、内面はナデ調整である。口縁端部に突帯が貼り付けられている。9は外面はナデ、内面はミガキ調整である。口縁下3mmに幅の狭い低い突帯が貼り付けられている。10は外面は右下から左上方向のナデ上げで、1単位の幅が1cm以下で中央がややくぼむことから調整原体は巻貝の可能性がある。内面は横方向のナデである。突帯部は欠損している。

第16図は突帯を持たない深鉢である。

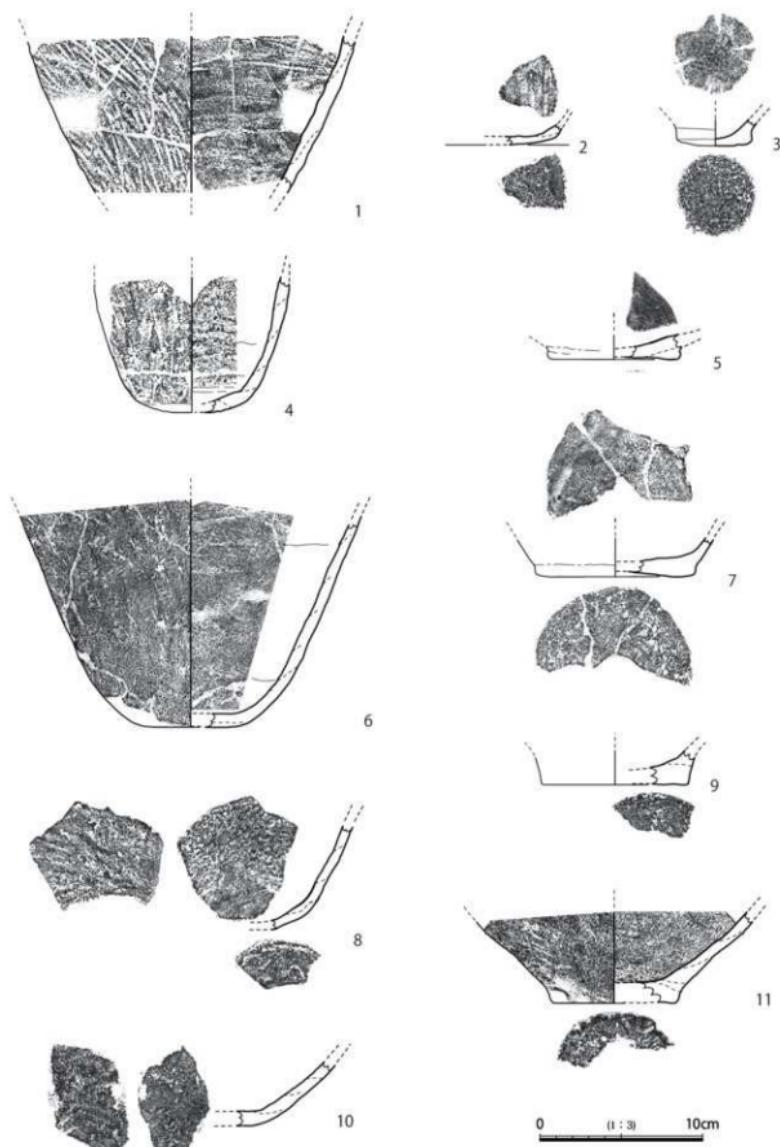
第16図1は外面はミガキ、内面はナデ調整である。外面の口縁下1cmに1条の沈線が廻らされている。2は外面が何らかの工具を使用した横方向のナデ、内面は横方向のケズリ調整である。3は口縁直下の外面に幅約1cmの帯状のくぼみが廻るもので、胴が張る。器面は内外面とも平滑なナデ調整である。4は外面は単位の小さい斜方向のナデ、内面は斜方向のケズリ調整である。5は外面はケズリ、内面は平滑なナデである。6は口縁端に厚みがあるので、外面は単位の小さいナデが斜方向に認められ、巻貝条痕の可能性がある。内面は平滑なミガキである。7は外面は単位の小さいナデ、内面が比較的平滑なナデである。8は外面は横方向のケズリとミガキで、内面はナデ調整である。

第17図1～5は浅鉢である。

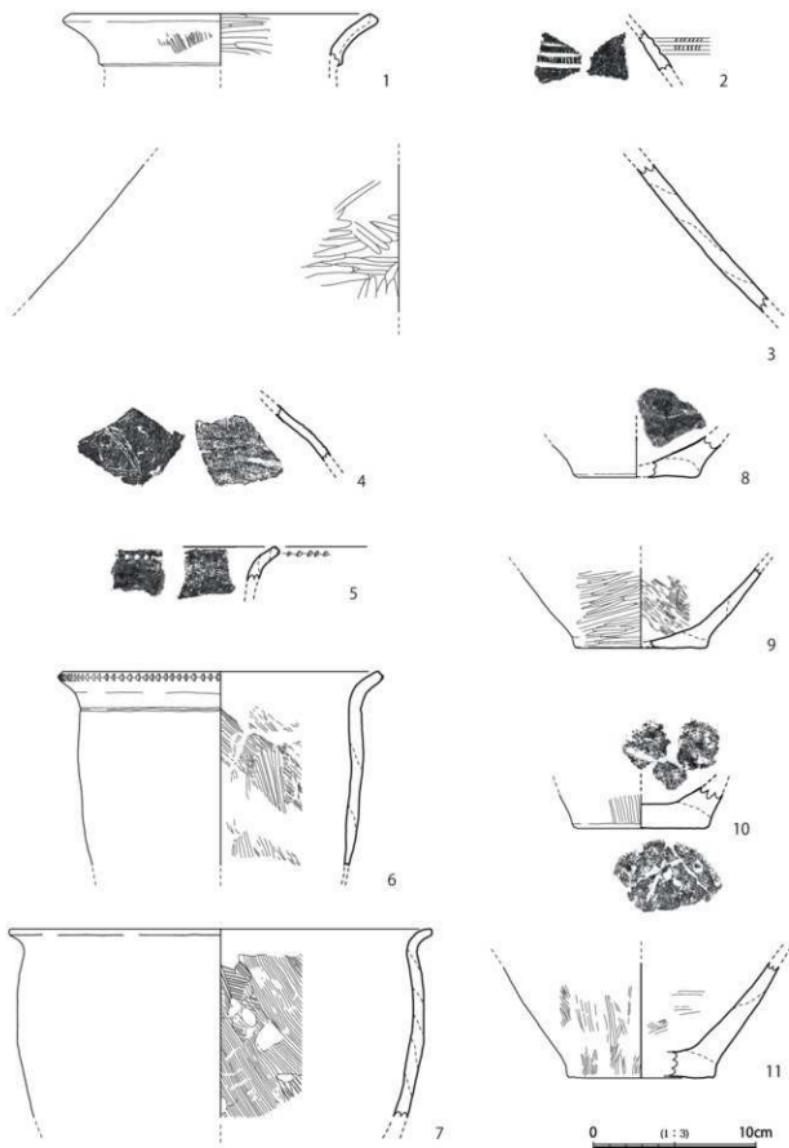
第17図1は肩部が折れて口縁が内傾する器形で、内外面とも平滑なミガキ調整である。口縁直下と肩部に断面U字状の深い沈線が廻らされており、沈線の一部に赤色顔料が残っていることから、本来は器面全面に赤色顔料が塗布されていたと思われる。2は口縁が開く器形であろう。内外面とも単位の小さいケズリ調整である。3は外面はミガキ、内面はナデ調整である。口径13.5cm。4は砲弾



第17図 NR03出土遺物(6) (S=1:3)



第18図 NR03出土遺物(7) (S=1:3)



第19図 NR03出土遺物(8) (S=1:3)

形を呈するもので、外面は凹凸のある原体による斜方向のナデ、内面は比較的凹凸の少ないナデ調整である。口径 12.8cm。5 も砲弾形を呈するもので、外面はナデ及びミガキ、内面はナデ調整である。口径 13.4cm。

第 17 図 6 は突帯文土器の壺の口縁部である。外面は不定方向のナデ、内面は横方向のナデ調整である。口縁端部に突帯が貼り付けられ、浅い刻目が施されている

第 18 図は胴部または底部だけが残存するものである。

第 18 図 1 は深鉢の胴部で、外面は斜方向の条痕で一部ナデ消されており、調整原体は巻貝の可能性がある。内面は横方向のナデ調整である。2 は丸底の底部で、接地面は若干平坦に仕上げられている。外面はミガキ、内面はナデ調整である。3 は円盤を貼り付けたような底部で、外面は風化、内面は滑らかなナデ調整である。底径 4.6cm。4 は浅鉢の下半部と思われる。丸底だが、接地面は若干平坦に仕上げられている。外面は上下方向の石動痕を伴うケズリ、内面は横方向のナデ調整である。底径 6.0cm。5 は深鉢の丸底にドーナツ状の粘土を貼り付けて平底に成形したものである。内外面ともナデで滑らかに仕上げてられている。底径 8.1cm。6 は深鉢の胴～底部で、底部は丸底で接地面は若干平坦に仕上げられている。胴部外面はケズリ後にミガキ、内面は斜方向のケズリ後に横方向のナデ調整、底の内外面はナデ調整である。底径 4.6cm。7 は平底の底部で、円盤の縁から胴部が立ち上げられている。内外面とも滑らかなナデ調整である。底径 9.7cm。8 は深鉢の丸底付近である。外面は凹凸のあるナデ、内面は滑らかなナデ調整である。9 は平底の底部で、円盤状の粘土の縁から胴部が立ち上げられている。内外面とも滑らかなナデ調整である。底径 9.0cm。10 は深鉢の丸底付近である。外面は若干凹凸のあるナデで、内面は滑らかなナデ調整である。11 は浅鉢の底部と思われる。平底で、円盤状の粘土の縁から胴部が立ち上げられている。内外面とも滑らかなナデ調整である。底径 7.5cm。

第 19 図は弥生時代前期の土器である。

第 19 図 1 は壺の口縁部で、外面は斜方向のハケメ後ヨコナデ、内面は滑らかなミガキが施されている。口径 18.3cm。2 は壺の胴部の文様帶の上の部分で、頸部との境界の削り出し直下に 2 条のヘラ描き沈線が廻らされ、凸部には縱方向の細かい刻みが施されている。沈線の下には弧を描く浅いヘラ描きが見え、連弧文の一部の可能性がある。3 は大型の壺の頸部で、外面はミガキ、内面はシボリ後にナデが施されている。4 は壺の胴部で、外面はミガキ後にヘラで文様が描かれている。木葉文の一種に見えるが、残存片断が小さいため明瞭でない。内面調整は横方向のナデである。5 は甕の口縁部で、如意形口縁の口唇端部にヘラ状工具で刻目が施されている。調整は内外面とも横ナデと思われるが、風化が著しい。6 は甕で、直線気味に外反する口縁の口唇端部に刻目が施され、頸部に 1 条の沈線が廻らされている。外面と口縁の内外面はナデ、胴部内面は縱～斜方向の目の細かいハケメ調整である。口径 19.4cm。7 はシンプルな如意形口縁の甕である。外面と口縁内外面はナデ、胴部内面は斜方向の目の細かいハケメ調整である。8 は壺の底部で、外面はミガキ、内面はナデ調整である。底径 7.4cm。9 も壺の底部で、外面はミガキ、内面は目の細かいハケメ調整である。底径 8.1cm。10 は甕の底部で、外面にハケメ状の痕跡が残るが、風化のため明瞭でない。底径 8.0cm。11 は甕の底部で、外面は上下方向のハケメ、内面は斜方向のハケメ後にナデが施されている。底径 8.9cm。

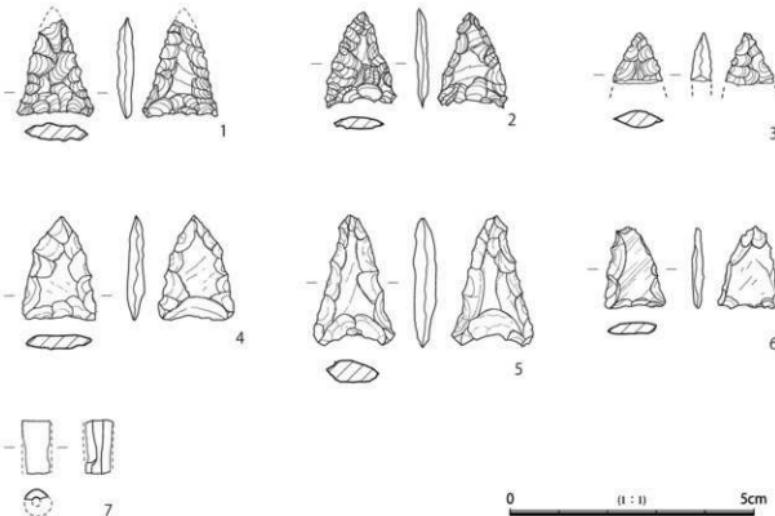
(2) 石製品(第20図)

第20図1～3は黒曜石製の鏃である。1と2は基本的に平基式で、2には若干の抉りがみられる。1は先端部を欠損するもので、残存長2.0cm、最大幅1.6cm、最大厚0.3cm、重量0.73g。2は完形品で、長さ1.9cm、最大幅1.4cm、最大厚0.2cm、重量0.63g。3は基部を欠損するものである。

第20図4～5は安山岩製の鏃である。4は平基式で、長さ2.2cm、最大幅1.4cm、最大厚0.35cm、重量1.02g。5は基部に若干の抉りが入るもので、長さ2.7cm、最大幅1.9cm、最大厚0.45cm、重量1.63g。6は片面を平滑に研磨した後、押圧剥離により成形された一部磨製の鏃で、平基式である。長さ1.7cm、最大幅1.2cm、最大厚0.2cm、重量0.54g。

第20図7は緑色凝灰岩製の管玉である。やや灰色がかった緑色を呈するもので、孔は両面から穿たれており、表面は擦痕が残らないほど丁寧に磨かれている。長さ1.1cm、直径0.6cm、孔径0.2cm以下、重量0.18g。

なお、珪の土(0.165m³)を全て洗浄した結果、0.1～0.5mm程度の黒曜石の微細な剥片が大量に出土し(図版6上)、その総重量は62.74gである。また、安山岩の剥片も多く見つかっており(図版6下)、総重量28.64gである。



第20図 NR03出土遺物(9) (S=1:1)

(3) 自然遺物

畦の土 0.165mについて洗浄を行ったところ、動物の骨や植物の種子などの自然遺物が出土した。以下で、動物遺存体と植物遺存体に分けて報告を行い、主要なものについては図版 7、8 で写真を掲載する。

①動物遺存体（図版 7）

魚類、鳥類、哺乳類の歯及び骨が出土している。魚類の歯の一部を除き、大半の骨は火を受けて白色を呈しており、若干収縮している可能性がある。

哺乳類

大型哺乳類と中・小型哺乳類がみられる。

大型哺乳類ではニホンジカの火を受けた鹿角の小片 1 点と、ニホンジカの遊離歯（臼歯）の小片が 5 点出土し、ニホンジカもしくはイノシシの火を受けた四肢骨の骨幹部片が 3 点出土している。中・小型哺乳類では、種は特定できないがイタチやムササビもしくはテンやタヌキ大で、火を受けた歯根部 2 点と、火を受けたかは不明であるが褐色を呈する歯根部 1 点、椎骨（頸椎か）1 点、尾椎 1 点、中手骨または中足骨の近位片 1 点、基節骨または中節骨 2 点が出土している。

鳥類

キジよりも若干小さいと思われる、鳥類の火を受けた橈骨遠位の小片が 1 点出土している。火を受けている。

魚類

魚類の歯と骨は多く、海水魚のタイ科が多く確認された。^{図 6}

火を受けた体長 30 ~ 40cm 大のヘダイの臼歯 1 点のほか、犬歯や白歯など 380 点（うち火を受けたと考えられるもの 97 点）を確認した。歯の多くがタイ科のものだと考えられる。タイ科の火を受けた歯骨もしくは前上顎骨の小片 1 点も出土している。破片の形態やからへダイもしくはクロダイ属の可能性が高いものである。また、種不明の火を受けた椎骨 3 点と背鱗や臀鱗などの棘が多数出土している。

②植物遺存体（図版 8）

炭化したコメ 4,830 点とクリ 2 点のほか、種類の特定できない種実が多数出土している。

コメ

炭化したコメ、いわゆる炭化米が 4,830 粒出土している。若干の縮みがあると思われるが、1 粒の大きさは縦 0.5cm 弱、幅 0.25cm 前後である。3 粒について AMS 法による年代測定を行ったところ、804-430cal BC であることが分かった（第 4 章参照）。

クリ

炭化したクリが 2 粒出土している。若干の縮みがあると思われるが、大きさは縦 1.45cm、幅 1.8cm、厚み 0.95cm 程度である。

その他

コメ、クリ以外にも多くの炭化した種実類が出土している。

3. 出土地不明遺物（第21・22図）

(1) 土器（第21図）

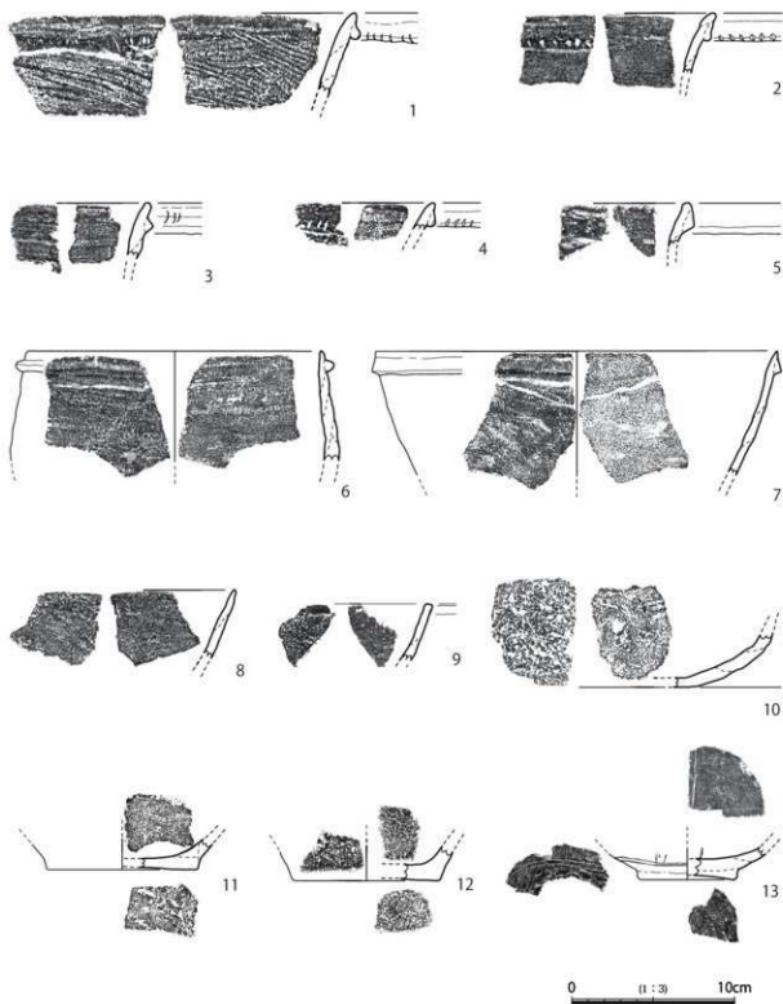
第21図は縄文晩期の土器である。

第21図1は突帯文土器の深鉢で、外面は凹凸のある斜方向のナデ、内面はサルボウタイプの二枚貝条痕が施されている。口縁下5mmに突帯が貼り付けられ、腹縁が滑らかな二枚貝で刻目が施されている。2は突帯文土器の深鉢の口縁部で、内外面とも横方向のナデ調整である。口縁下5mmに突帯が貼り付けられ、刻目が施されている。3は突帯文土器の口縁部で、外面は横方向のナデ、内面は横方向のミガキ調整で、口縁外面に小さなハマゲリタイプの二枚貝の弧を描く腹縁圧痕が3カ所にみられ、これが調整原体と考えられる。口縁下6mmに突帯が貼り付けられている。4は突帯文土器の口縁部で、小片のため器面調整は不明である。口縁ほぼ直下に突帯が貼り付けられ、放射肋のあるサルボウタイプの二枚貝で刻目が施されている。5は突帯文土器の口縁部で、小片のため器面調整は不明である。口縁端部に突帯が貼り付けられている。6は突帯文土器の深鉢で、外面は横方向のケズリ後に一部ミガキ、内面は横方向のナデ調整である。口縁下4mmに突帯が貼り付けられている。外面には糊の圧痕があり、糊痕は長さ6mm、幅2.7mmを測る（図版17）。口径18.0cm。7は突帯文土器の深鉢で、口縁下2mmに突帯が貼り付けられている。外面は若干凹凸のあるナデ、内面は滑らかなナデ調整である。口径24.6cm。8は単純口縁の鉢類の口縁部で、外面はケズリ後にナデ、内面は滑らかなナデ調整である。9は単純口縁の鉢類の口縁部で、外面は炭化物付着のため調整不明、内面は滑らかなナデ調整である。10は底部で、丸底を呈している。11は底部で平底を呈する。内外面とも器面調整はナデである。底径9.0cm。12は底部で平底を呈する。器面調整は風化のため不明である。底径9.0cm。13は浅鉢もしくは弥生土器の可能性も残るもので、平底である。底から立ち上がる器壁外側はナデ調整で、ヘラ書きによる2条の沈線が廻らされ、その上には上下方向の細い沈線が3カ所に描かれている。内面は滑らかなナデで、本来は見込の中央を交点にして「十」字状に沈線がヘラ書きされていたと思われるが、欠損のため一部が残存するのみである。底径5.8cm。

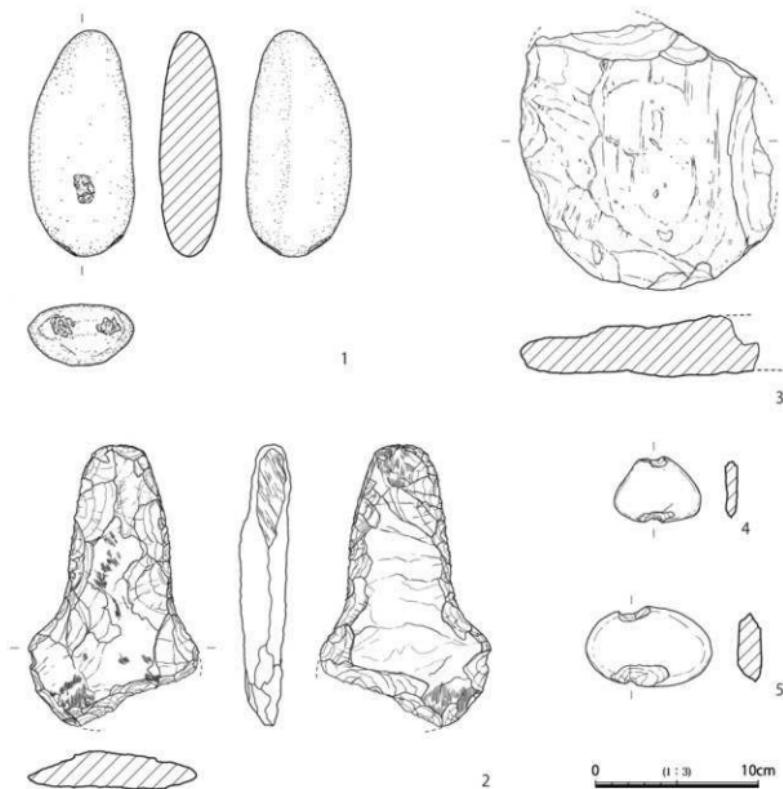
(2) 石製品（第22図）

第22図1は丸味のある細長い丸味を帯びた礫に若干の研磨が施された（使用痕か）敲石である。下部中央に擦痕、その両脇に敲打痕がみられ、側面にも1×1.5cmの敲打痕がみられる。石材は不明。縦13.8cm、最大幅6.4cm、最大厚3.8cm、重量404.54g。2は石鍬である。基本的には敲打により形成されたもので、片側側面の基部から下4cmは幅1.5cmの研磨で成形された、一部磨製の打製石鍬である。基部と刃部付近の表面は使い込まれて剥離面が滑らかになっている。刃部は使用中に欠損したようであるが、欠損後もさらに使用が続けられており、欠損部割れ口も表面が擦り減っている。石材は不明だが、両側面が褐色がかる石が使用されている。残存長17.3cm、刃部残存最大幅10.4cm、基部幅5.8cm、最大厚2.1cm、重量508.69g。3は砥石か石皿の可能性があるので、両側面が滑らかで、片側面の中央には溝状に極めて浅いU字状のくぼみがみられる。石材は不明。全長16.4cm、最大幅15.1cm、最大厚3.7cm、重量1,700g。4、5は石錘である。両方とも丸味を帯びた扁平な自然石が使用されている。4の抉りは2ヶ所とも両面から打ち欠いて作られている。石材は不明。縦4.0cm、横

5.3cm、最大厚0.8cm、重量22.25g。5の抉りは1ヶ所は両面から、もう1ヶ所は片面だけから打ち欠いて作られている。石材は不明。縦4.9cm、横7.9cm、最大厚1.5cm、重量73.67g。



第21図 出土地点不明遺物(1) (S=1:3)



第22図 出土地点不明遺物 (2) ($S=1:3$)

【第3章 註】

1. 土層観察用の畦は幅0.5m×長さ2.2m、高さ0.15mで、土砂の量は0.165m³（土のう袋17袋分）である。た。水洗の方法は、採取した土砂を最終的には1mmメッシュのふるいに入れ、黒褐色粘土を洗い流した。この時点で確認できた遺物を採取したほか、ふるいの中に残った土砂を乾燥させた後に虫眼鏡等を使って微細遺物を取り上げた。
2. セキスイコンテナ TS-28（内寸：幅34×長さ54.5×深さ15cm）に仕分け、分類した状況。
3. 第9図の南壁セクションの水田耕作土層（第6層）の上面の値。
4. 近くで立木2本が押し倒された状況で検出されたことから、ここでは根そのものが押し流された可能性も考えられる。
5. 石丸氏によれば、骨が火を受けて白色になるには最低700°C程度の温度下に置かれる必要があり、食肉のために炙ったような状況ではない。骨になった状態で火の中に投げ込まれたか、もしくは肉が焼けて無くなった後も骨が火の中に放置された状況にあったのかもしれないとのことである。
6. 石丸氏によれば、タイ科の歯が多いのはタイ科の骨よりも歯が丈夫で残りやすいことが影響している可能性もあり、その他の魚類が含まれていないとは断言できないとのことである。
7. 植物遺存体は今回は同定を行っておらず、判別できたものはコメとクリだけであるが、その他の種子類については図版8の上で写真を掲載している。

第4章 自然科学分析

福富松ノ前遺跡における AMS 年代測定

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

1.はじめに

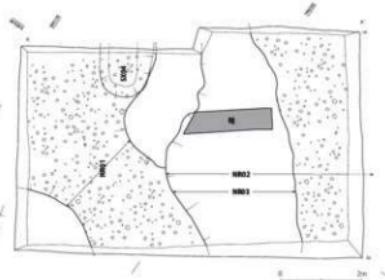
福富松ノ前遺跡は松江市東部朝酌町福富に位置し、大橋川河口部左岸の小谷谷口に立地する。

本報は文化財調査コンサルタント株式会社が、公益財団法人 松江市スポーツ財団の委託を受け、流路：NRO3 の埋積時期を確認する目的で実施・報告した、調査報告書の概報である。

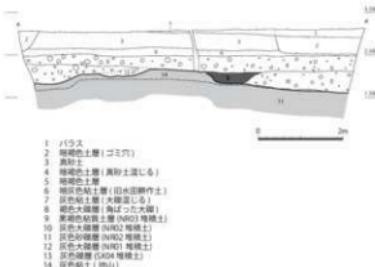
2.試料について

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團により採取・保管中の試料から、分析試料の御提供を受けた。測定試料は、トレンチ内で NRO3 に設定された観察用「畦」から採取された土壌を水洗して検出・選別された炭化米である。調査区平面図(第23図)中に、「畦」の位置を示し、断面図(第24図)中に自然流路：NRO3 の層位(9層)を示す。

これらの平面図及び断面図は、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團より御提供を受けた原図をもとに、作成した。



第23図 調査区平面図



第24図 調査区断面図

3.AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラフアイトに調整した。 ^{14}C 濃度の測定には

タンデム型イオン加速器を用い、半減期：

5568 年で年代計算を行った。暦年代較正

には OxCal ver. 4.3 (Bronk Ramsey 2009) を用い、INTCAL13 (Reymer et al. 2013) を利用した。

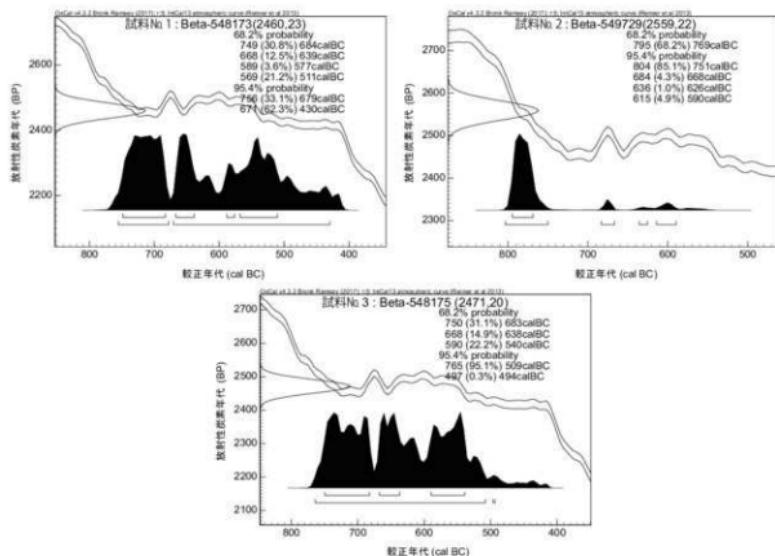
4.AMS 年代測定結果

年代測定結果を第1表及び第25図に示す。第25図には OxCal ver. 4.3 (Ramsey 2009) による試料ごとの暦年較正図を示した。第1表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の年代を示している。

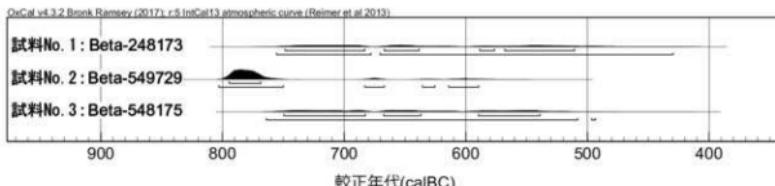
5. 年代測定値について

第1表 年代測定結果

試料番号	出土点(遺跡ほか)	状況	重量(g)	測定期間	最初期	$\Delta^{14}\text{C}$	$\Delta^{14}\text{C}$ 校正年代 (yrBP±1σ)	算年較正年代 (yrBP±1σ)	$\Delta^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP±1σ)	$\Delta^{14}\text{C}$ 年代を算年內に修正した年代範囲		測定期間			
										1σ	2σ				
1	縄	良文化	0.0698			-24.48	2480±23	2480±23	2480±23	760-894 cal BC (30.9%)	669-939 cal BC (12.0%)	760-894 cal BC (30.9%)	676-979 cal BC (33.5%)	677-1030 cal BC (16.3%)	Beta-548173
2	縄	良文化	0.0673	縄文時代後期		-23.38	2528±22	2528±22	2528±22	796-799 cal BC (88.2%)	698-877 cal BC (5.4%)	796-799 cal BC (88.2%)	804-871 cal BC (85.5%)	826-928 cal BC (1.9%)	Beta-549729
3	縄	良文化	0.0667			-23.28	2482±20	2471±20	2471±20	750-862 cal BC (21.9%)	669-838 cal BC (14.9%)	750-862 cal BC (21.9%)	760-989 cal BC (95.0%)	687-694 cal BC (0.9%)	Beta-548175



第25図 历年較正結果



第26図 历年較正結果の分析

得られた年代値は、 2σ で 804-430 cal BC の範囲を示した。個々の試料で見ると試料 No.1 と 3 がほぼ重なり、試料 No.2 がやや古い値を示す。

自然流路 NRO3 からは縄文時代晚期の土器が出土し、この時期に埋まったと考えられている。

これに対し 804-430 cal BC という年代は、従来からの年代観では縄文時代晚期に相当する。一方で、藤尾ほか（2005）の示したいわゆる「歴博の年代観」では、804-430 cal BC という年代は弥生時代早期末～前期に掛けての年代を示している。ただし、弥生時代の開始にはその定義を含め、年代測定法の進化から、今後議論が必要な余地がある。

しかしながら今回の測定試料が「炭化米」であったことの意義は大きく、今回検出された炭化米が島根県下における最も古い段階の稻作を示す可能性があることである。

6. 引用文献

- Bronk Ramsey, C.(2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1),337-360.

藤尾慎一郎・今村峯雄・西本豊弘(2005) 弥生時代の開始年代 -AMS- 炭素 14 年代測定による高精度年代体系の構築—、総研大文化科学研究, 1, 69-96.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013)IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4),1869-1887.

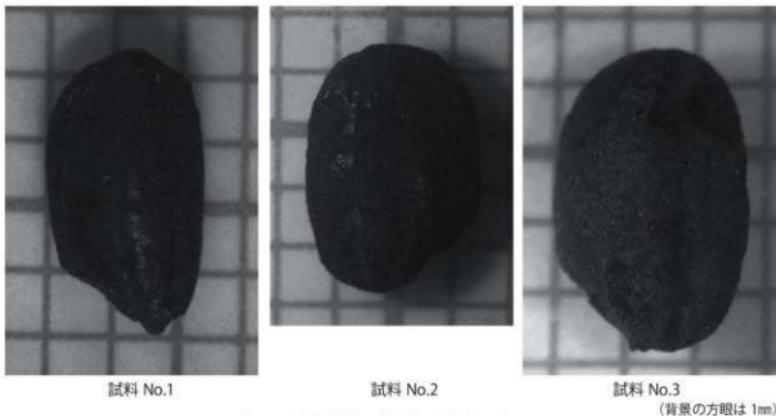


写真 6 分析試料の炭化米顕微鏡写真

第5章 総括

福富松ノ前遺跡は、独立丘から派生する小支谷の出口部分に位置しており、小規模な扇状地の扇端部にあたる。明確に遺構と呼べるものは検出できず、複数の土石流と流路を確認した。

遺物はこの土石流のうち、NR02（第9図10・11層）の礫層中と、NR02の最終段階の流路 NR03（第9図9層）から縄文時代後期～弥生時代前期の遺物がまとまって出土した。

以下では、第1節で自然地形について簡単に報告し、第2節では遺物の特徴を述べる。最後に地域の歴史の中での位置づけや課題を整理してまとめとする。

第1節 自然地形

調査区内で4つの流路を検出しており、それらの切り合い関係は明確であった。

最も古い流れは NR01 であり、北西から南東へ向けて流れ、SX04 の窪みを作り出している。右岸の礫層下からは木の株を検出しており、土石流の前には樹木が生育するような環境にあったようだ。遺物は出土しておらず、この流路の時期は不明である。

この土石流堆積土を切る格好で検出したのが NR02 である。NR01 の碎屑物（第9図12層）と NR02のそれ（10層）は良く似ており、近い場所から流れ下った土石流なのかもしれない。最下層には砂礫（11層）が堆積しており、この点に NR01との違いを認めることができる。遺物は少量ではあるが縄文時代晚期後半～弥生時代前期の遺物が出土している。

NR03 は前述した NR02 の最終段階の流路である。有機質を多く含んだ黒褐色粘土を主体とし、極粗粒砂や大礫を含んでいる。土石流（10層）の後にできたこの流路は最終的には疊みにわり湿地のような環境となり、やがて埋没していく状況と推察される。ここからは縄文時代晚期後半～弥生時代前期を中心とした遺物が多数出土しており、動植物遺存体の出土は当時の人々の生活や生活環境をより具体的に知ることができる。この NR03 と下層にあたる NR02 から出土した遺物に型式的な時期差はみられなかった点は注目される。

この後、調査区全体を覆うように堆積した土石流が8層である。10・12層と礫の粒径や色調などで明確に分層が可能であった。この層についても遺物が出土していないため時期は分からない。

このように、福富松ノ前遺跡とその周辺は土石流が発生し易い、不安定な場所であったことが窺える。

第2節 遺物

ここでは NR03 から出土した遺物について報告する。

まず、NR03 から出土した土器は、縄文時代後期～弥生時代前期前半のものであったが、縄文時代晚期後半の突帯文土器と弥生時代前期前半の遠賀川式土器が大多数を占める。これは縄文時代から弥

生時代へ移行する段階の良好な一括資料である。

突帯文土器の大半は深鉢で、壺が1点出土している。成形時の粘土接合はすべて内傾である。深鉢の口縁は尖り気味でやや外反するものが多く、器形は寸胴である。突帯は口縁端部から口縁下1cmの間に廻らされたものが大半を占め、突帯が二段に廻らされたものはみられない。突帯の断面は低い三角形や、高めの三角形のほか、垂れた突帯がみられる。また、刻目が施されたものと施されていないものがみられるが、施されたものは少ない。口唇に刻目が施されたものは1点だけである。調整は、外面ははらかの工具で斜方向のケズリが施されたものと、滑らかなナデが施されたものが多く、サルボウタイプの二枚貝条痕が施されたものはわずかである。内面は放射肋の目立たない二枚貝で横方向にナデが施されたものが多い。これらの特徴から、概ね濱田編年V期が大半を占めると考えられる。

遠賀川式土器の器種には壺と甕がみられる。壺は口縁や頸部の壇目に段が残る、弥生時代前期でも古いタイプである。甕は頸部に段が残るものは無く、頸部に1条のヘラ描き沈線が廻らされたものと、沈線が施されていない断面如意型のものが出土している。これらの特徴から、松本編年I—2様式にあたると判断できる。

かねてより、突帯文土器から遠賀川式土器の移行期における両者の共伴関係についての研究がすすめられており、濱田は濱田編年V期のイキスタイルと、弥生土器の松本編年I—2様式の中でも新相とされるものが共伴し、山陰地域の5遺跡で確認できると具体例を示している（濱田2014）。一方、坂本は矢野遺跡で弥生時代前期の土器編年を行い、Z類無刻目突帯文深鉢が矢野1式、つまり松本編年I—1様式と共伴すると考えている（坂本2010）。福富松ノ前遺跡では、突帯文土器のイキスタイルと松本編年I—2様式の弥生土器が共伴して出土している。

また、堆積土をすべて水洗いすることはできなかったが、土層観察用に残していた粧の土について水洗を行った。土量にすると0.165m³であり、ここからは微細遺物に混じって動植物遺存体も採取することができた。微細遺物の中には1～5mmの剥片を含んだ黒曜石片が62.74g、同様に安山岩片が28.64g出土し、黒曜石製の錐3点と安山岩製の錐3点が出土している。ここでは、2種類の石材を利用して石器製作が行われていたことをが明らかになった。また、図版7・8に掲載したように動植物遺存体には、ニホンジカの角や歯の遊離片、ニホンジカまたはイノシシの四肢骨、種名不明の小型哺乳類、鳥類のほか魚類の歯や骨、炭化米4830点、クリ2点、不明種子がある。このうち動物遺存体の大半が白色に変色するまで火を受けており、骨自体が高温で焼かれた状態と判断された。狭い範囲で異種の骨が焼かれた状態で見つかったことは、明らかに人間が関与したことを示すものである。

炭化米3点についてAMS法による年代測定を行ったところ、最も古い値を示すものが試料No.2のBC804～BC751年、新しい値が試料No.1のBC671～BC430年であった。これらの炭化米は同時期の一括資料と考えられることから、BC804～BC430年の資料となる。この時代に稲作が行われていた遺跡がまた一つ増える結果となった。

第3節 まとめ

福富松ノ前遺跡は西の独立丘から低地方向への土石流が顕著であり、土石流 NRO2 の堆積土中と、それを切る NRO3 からは同時期（縄文時代晚期後半～弥生時代前期）の土器が出土した。このことは、土石流後の土器型式が変わらない間に当地周辺で生活が営まれたことと理解でき、当時の人々はこのような自然条件のもとでも生活を営んでいたことが分かった。こうした低地への進出は稲作との関連が想定される。また、わずかにだが出土している縄文後期土器は、低地への進出がさらにさかのぼる可能性を持つ。

さて、今回の調査成果として NRO3 から出土した炭化米と土器の一括資料があげられる。

NRO3 から出土した多量の炭化米により、当地周辺では縄文時代晚期後半には既に稲作が行われていることが明らかとなった。稲作が行われていた時期は、炭化米の AMS 法による年代測定を行ったところ、BC804～BC430 年という結果であった。

弥生時代前期の松江市内の遺跡で炭化米の AMS 法による年代測定が行われた遺跡は、本遺跡の他には西川津遺跡^③（鶴場地区）があり、両遺跡の炭化米の年代を第2表で示した。それらの年代はほぼ同時期と思われる。

NRO3 から出土した土器では、突帯文土器と遠賀川式土器が共伴して出土した点が注目される。縄文から弥生への移行期にあたる良好な一括遺物と評価できる。

突帯文土器は縄文土器の最終段階のものであり、成形時の粘土接合は内傾で、これに対し遠賀川式土器は北部九州で成立し、成形時の粘土接合は外傾で、全く系譜を異にする。この遺跡段階より少し時期が下ると、突帯文土器は外傾接合であったり、器面調整にハケを使用するなど、両者を折衷するものが現れるが、この遺跡ではそうした点は認められず、少なくとも土器の製作段階では、別々の集団であるといえる。

突帯文土器の新段階の様相をみると、出雲市矢野遺跡^②のように遠賀川式土器のみが出土する遺跡や、西川津遺跡（鶴場地区）の河川^③のように大量の遠賀川式土器にわずかな突帯文土器が混じる遺跡、北講武氏元遺跡^③のように突帯文土器と遠賀川式土器が相半ばする遺跡がある一方、石台遺跡^④のように突帯文土器と炭化米が出土していても遠賀川式土器が出土しない遺跡もあり、初期農耕集落の成立に

第2表 松江市で出土した炭化米の AMS 法による年代一覧

遺跡名	出土地	試料№	2σ暦年代範囲
福富松ノ前遺跡	NRO3	試料№1	671～430calBC (62.3%)
福富松ノ前遺跡	NRO3	試料№2	804～751calBC (85.1%)
福富松ノ前遺跡	NRO3	試料№3	765～509calBC (96.1%)
西川津遺跡	B-1 区 SX01 上層№6	試料№11	770～506calBC (92.2%)
西川津遺跡	B-1 区 SX01 下層№1	試料№12	671～483calBC (57.3%)
西川津遺跡	B-1 区 SD13 (上層)	試料№13	767～505calBC (91.5%)
西川津遺跡	B-1 区 SD13 (下層)	試料№14	595～408calBC (61.8%)

は、様々な過程があったことを窺うことができる。

福富松ノ前遺跡では突帯文土器を主体として、わずかに遠賀川式土器が含まれる状況であった。このことは、突帯文土器を製作、使用する集団に少数の遠賀川土器を使用する人々が合流した集落として評価できるかもしれない。移行期においては、前述のように各地域での初期農耕集落の成立にはさまざまな成立過程があったことを示唆する調査例を加えたこととなる。いずれにせよ、今回の調査地では、集落は短期間しか存続せず、土石流によって付近から撤退しており、こうした進出と撤退を繰り返しながら、定住的な農耕集落が成立するものと考えられる。

今後さらにこうした調査例を積み重ねることによって、出雲地方における弥生農耕集落の成立過程が明らかになることを期待して総括とする。

【第5章 註】

- 島根県教育委員会『主要地方道松江島根線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 西川津遺跡・古屋敷II遺跡』2013年
- 島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会『新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 矢野遺跡』2010年
- 島根県鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4 北講武氏元遺跡』1989年
- 江川幸子・内田律雄「石台遺跡の試掘調査」『季刊文化財』第62号 1988年

【第5章 参考文献】

- 濱田竜彦 2014年「7. 島根県飯南町森III遺跡の突帯文土器と遠賀川式土器」島根県古代文化センター『古代文化センター研究論集第13集 山陰地方の縄文社会』
- 坂本治 2010年「第11章考察第1節出雲における稻作文化の伝播過程－矢野遺跡の弥生土器・石器・木器から－」島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会『新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 矢野遺跡 自然科学分析・考察編(第4分冊)』

第3表 遺物觀察表

土 器

標 因番号	種類	器 横	法量(cm)	胎 土	燒成	色 調	調整・手法の特徴	備 考
11-1	縄文	深鉢		石英、長石。金赤母灰 少々含む	良好	外 淡黄色～黒色 内 灰黃色～黒褐色	外 ナデ、ケズリ 内 ナデ、ミガキ	
11-2	縄文	深鉢		石英、長石を少々含む	良好	外 細灰色～黒色 内 灰黃褐色～褐色	外 ナデ 内 ナデ	
11-3	弥生	甕		石英、長石を少々含む	良好	外 にぶい黄褐色～黒色 内 にぶい黄褐色	外 ナデ 内 ナデ	朝日
12-1	縄文	深鉢 深鉢分		石英、長石を多く含む	良	外 細灰褐色 内 灰黃色	外 ナデ・消し縄文 内 細化	福田K2式か
12-2	縄文	盆		石英、長石を多く含む	良好	外 黑色 内 褐色～灰黃褐色	外 ミガキ 内 ミガキ	
12-3	縄文	江口土器 か		石英、長石を多く含む	良	外 灰黃色～黒色 内 にぶい黄色	外 ミガキ 内 ナデ、ケズリ後王手	朝日以 赤色顔料付着
13-1	縄文	深鉢		石英、長石を少々含む	良	外 にぶい黄褐色 内 にぶい黄褐色	外 ミガキ 内 ケズリ後子手	
13-2	縄文	深鉢		石英、長石を含む	良	外 褐色～灰褐色 内 黑褐色	外 ミガキ 内 ナデ	
13-3	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を少々含む	やや軟	外 細色 内 淡黃色～にぶい黄褐色	外 ナデ、二枚貝集積 内 細化	朝日
13-4	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を多く含む	良好	外 にぶい黄褐色～灰褐色 内 にぶい黄褐色～灰褐色	外 ケズリ 内 一枚貝集積	朝日
13-5	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を少々含む	やや軟	外 灰黃色 内 にぶい黄褐色	外 二枚貝集積 内 ナデ	朝日
13-6	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を多く含む	やや軟	外 にぶい黄褐色～灰褐色 内 にぶい黄褐色	外 細化 内 ナデ	朝日
13-7	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を少々含む	やや軟	外 淡黃褐色 内 にぶい黄褐色	外 ナデ 内 ナデ	
13-8	縄文	突堤文 深鉢	口径(5.4)	石英、長石を少々含む	良好	外 にぶい黄褐色～黒色 内 にぶい黄褐色～黒色	外 ケズリ、ミガキ 内 ナデ	
13-9	縄文	突堤文 深鉢分	口径(2.19)	石英顆を少々含む	良好	外 黑色 内 淡黃褐色～黒色	外 ケズリ 内 ナデ	
13-10	縄文	突堤文 深鉢	口径(1.5)	石英、長石を多く含む	良好	外 にぶい黄褐色～黒色 内 にぶい黄褐色～黒褐色	外 吐貝集積 内 ナデ	
13-11	縄文	突堤文 深鉢	口径(3.0)	石英、長石を少々含む	良	外 灰白色～黒褐色 内 灰白色～淡褐色	外 ナデ 内 ナデ	
14-1	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を多く含む	良好	外 にぶい黄褐色～灰褐色 内 にぶい黄褐色	外 ナデ 内 ナデ	
14-2	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を多く含む	良	外 黑色 内 にぶい黄褐色～灰褐色	外 ケズリ 内 ケズリ	
14-3	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を少々含む	良好	外 にぶい黄褐色～黒色 内 灰褐色	外 ナデ 内 ナデ	朝日
14-4	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を多く含む	良好	外 細灰褐色～灰褐色 内 黑褐色	外 ケズリ 内 ナデ	
14-5	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を少々含む	良好	外 にぶい黄褐色～黒色 内 細灰褐色～黒色	外 ケズリ 内 ナデ	
14-6	縄文	突堤文 深鉢	口径(2.46)	石英、長石を少々含む	良好	外 黑色 内 黑褐色～黒色	外 ケズリ 内 ナデ、二枚貝集積	
14-7	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を少々含む	良	外 にぶい黄褐色～黒色 内 淡黃色	外 ナデ 内 ナデ	
14-8	縄文	突堤文 深鉢	口径(2.93)	石英、長石を少々含む	良好	外 黑色 内 にぶい褐色	外 ミガキ 内 ミガキ	
15-1	縄文	突堤文 深鉢	口径(2.46)	石英、長石を少々含む	良好	外 にぶい黄褐色～黒褐色 内 にぶい黄褐色～灰褐色	外 一枚貝集積 内 ナデ	
15-2	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を多く含む	良好	外 灰褐色 内 淡黃褐色	外 ナデ 内 ナデ	朝日
15-3	縄文	突堤文 深鉢		石英、長石を少々含む	やや軟	外 淡黃褐色 内 淡黃褐色～黃褐色	外 細化 内 細化	
15-4	縄文	突堤文 深鉢	口径(2.83)	石英、長石を多く含む	やや軟	外 灰白色～黒色 内 淡黃褐色～にぶい褐色	外 細化 内 細化	

土器

辨別番号	種類	形種	法量(cm)	胎 土	焼成	色 調	調査・手法の特徴	備 考
15-5	縄文	突頭文 深鉢		石英、長石粒を少々含む	良	外に灰・褐色～黒褐色 内 黒褐色	外 ナゲ 内 ナゲ	
15-6	縄文	突頭文 深鉢		石英、長石粒を多く含む	やや悪	外に灰・褐色～黒褐色 内に灰・黄褐色	外 ナゲ 内 ナゲ	
15-7	縄文	突頭文 深鉢	口径21.2	石英、長石粒を含む	良好	外 灰褐色～黒色 内 に灰・黄褐色～黒色	外 各目差痕 内 ナゲ	
15-8	縄文	突頭文 深鉢		石英、長石粒を多く含む	良	外 に灰・黄褐色～黒色 内 に灰・黄褐色～黒色	外 ナゲ 内 ナゲ	
15-9	縄文	突頭文 深鉢		石英、長石粒を含む	良	外 黑褐色～黒色 内 黑褐色～黒色	外 ナゲ 内 ミガキ	
15-10	縄文	突頭文 深鉢		石英、長石粒を多く含む	良好	外 開灰褐色～黒色 内 浅黃褐色～灰褐色	外 ナゲ 内 ナゲ	登目差痕か
16-1	縄文	深鉢		石英、長石粒を少々含む	良	外 黑褐色～黒色 内 黑褐色	外 ミガキ 内 ナゲ	
16-2	縄文	深鉢		石英、長石粒を多く含む	良	外 灰褐色～黒色 内 灰褐色	外 ナゲ 内 ケズリ	
16-3	縄文	深鉢		石英、長石粒を少々含む	良好	外 に灰・黄褐色～黒褐色 内 黄褐色	外 ナゲ 内 ナゲ	
16-4	縄文	深鉢		石英、長石粒を多く含む	良好	外 灰褐色～黒色 内 浅黃褐色～黒色	外 ナゲ 内 ケズリ	
16-5	縄文	深鉢		石英、長石粒を多く含む	良	外 に灰・黄褐色～黒色 内 白褐色～灰褐色	外 ケズリ 内 ナゲ	
16-6	縄文	深鉢		石英、長石粒を多く含む	良好	外 粉色～黒色 内 粉灰色～に灰い黄褐色	外 各目差痕か 内 ミガキ	
16-7	縄文	深鉢		石英、長石粒を多く含む	良	外 灰褐色～黒色 内 に灰・黄褐色	外 ナゲ 内 ナゲ	
16-8	縄文	深鉢		石英、長石粒を少々含む	良	外 灰褐色～黒色 内 に灰・黄褐色	外 ケズリ、ミガキ 内 ナゲ	
17-1	縄文	浅鉢		石英、長石粒を含む	良好	外 灰褐色 内 黑褐色	外 ミガキ 内 ミガキ	赤色顔料付着
17-2	縄文	浅鉢		石英、長石粒を少々含む	良	外 浅黃褐色～灰褐色 内 開灰褐色	外 ケズリ 内 ケズリ	
17-3	縄文	浅鉢	口径13.0	石英、長石粒を少々含む	良好	外 粉色～黒色 内 粉灰色～黒色	外 ミガキ 内 ナゲ	
17-4	縄文	浅鉢	口径12.8	石英、長石粒を少々含む	良好	外 灰褐色～黒色 内 黑色、保付着	外 ナゲ 内 ナゲ	
17-5	縄文	浅鉢	口径13.5	石英、長石粒を少々含む	良好	外 黑色 内 に灰・黄褐色～黒褐色	外 ナゲ、ミガキ 内 ナゲ	
17-6	縄文	突頭文 深鉢		石英、長石粒を多く含む	良好	外 に灰・黄褐色 内 に灰・黄褐色～黒色	外 ナゲ 内 ナゲ	朝日
18-1	縄文	深鉢		石英、長石粒を多く含む	良好	外 灰褐色～黒色 内 に灰・黄褐色～黒褐色	外 各目差痕か 内 ナゲ	
18-2	縄文	(底部)		石英、長石粒を多く含む	やや悪	外 粉色～浅黃褐色 内 に灰・褐色	外 ミガキ 内 ナゲ	
18-3	縄文	(底部)	底径4.6	石英、長石粒を多く含む	良	外 灰褐色 内 灰褐色	外 風化 内 ナゲ	
18-4	縄文	(底部)	底径4.0	石英、長石粒を多く含む	良	外 に灰・褐色～黒褐色 内 に灰・褐色～黒色	外 ケズリ 内 ナゲ	
18-5	縄文	(底部)	底径4.3	石英、長石粒を含む	やや悪	外 灰褐色 内 底面	外 ナゲ 内 ナゲ	
18-6	縄文	(底部)	底径4.0	石英、長石粒を多く含む	良	外 黄褐色～灰褐色 内 に灰・黄褐色～灰褐色	外 ケズリ後ミガキ 内 ナゲ	
18-7	縄文	(底部)	底径4.7	石英粒を多く含む	良好	外 浅黃褐色～灰褐色 内 浅黃褐色	外 ナゲ 内 ナゲ	
18-8	縄文	(底部)		石英、長石粒を含む	やや悪	外 浅黃褐色～浅黃褐色 内 底面	外 ナゲ 内 ナゲ	
18-9	縄文	(底部)	底径4.0	石英、長石粒を多く含む	やや悪	外 明赤褐色～灰褐色 内 に灰・黄褐色	外 ナゲ 内 ナゲ	

土 器

標図番号	種類	器種	法長(cm)	胎 土	焼成	色 調	調整・手法の特徴	備 考
18-10	縄文	(瓶部)		石英、長石粒を多く含む 雲母を少々含む	良好	外 に赤・黄褐色 内 黒褐色	外 ナデ 内 ナデ	
18-11	縄文	(瓶部)	底径(7.5)	石英、長石粒を多く含み 黒色雲母を少々含む		外 細灰色 内 細灰色	外 ナデ 内 ナデ	
19-1	弥生	壺	口径(8.3)	石英、長石粒を少々含む	良好	外 褐色～黑色 内 褐色～黑色	外 ハケメ施ナデ 内 ミガキ	
19-2	弥生	壺		石英、長石粒を多く含む	良	外 褐色 内 赤褐色	外 ミガキ 内 ナデ	
19-3	弥生	壺		石英、長石粒を少々含む	良	外 浅黄色 内 浅黄色	外 ミガキ 内 ナデ	
19-4	弥生	壺		石英、長石粒を少々含む	良	外 に赤・黄褐色 内 黑褐色	外 ミガキ 内 ナデ	
19-5	弥生	壺		石英、長石粒を多く含む	良	外 黃褐色～黒褐色 内 黄褐色	外 風化 内 風化	削目
19-6	弥生	壺	口径(19.4)	石英、長石粒を多く含む	良	外 に赤・黄褐色～黑色 内 浅黄色～細灰色	外 ナデ 内 ハゲメ	削目
19-7	弥生	壺	口径(25.9)	石英、長石粒を多く含む	良好	外 に赤・黄褐色～細灰色 内 黄褐色～灰黃褐色	外 ナデ 内 ハゲメ	
19-8	弥生	壺	底径(7.4)	石英、長石を多く含む	良	外 に赤・褐色 内 に赤・黃褐色	外 ミガキ 内 ナデ	
19-9	弥生	壺	(8.1)	石英、長石粒を少々含む	良	外 に赤・黃褐色 内 に赤・黃褐色	外 ミガキ 内 ハゲメ	
19-10	弥生	壺	底径(8.0)	石英、長石粒を多く含む	良	外 明黄褐色～灰黃褐色 内 細灰色	外 風化 内 風化	
19-11	弥生	壺	底径(8.0)	石英、長石粒を含む	良	外 に赤・褐色～赤・黃褐色 内 に赤・黃褐色～黒褐色	外 ハゲメ 内 ハケメ施ナデ	
21-1	縄文	突帯文 深鉢		石英、長石粒を多く含む	良好	外 黄褐色 内 に赤・黃褐色～細灰色	外 ナデ 内 ナデ、二段目条痕	削目
21-2	縄文	突帯文 深鉢		石英、長石粒を多く含む	良	外 黄褐色 内 に赤・黃褐色～黒褐色	外 ナデ 内 ナデ	削目
21-3	縄文	突帯文 深鉢		石英、長石粒を少々含む	やや軟	外 黄褐色 内 に赤・黃褐色～細灰色	外 ナデ 内 ミガキ	削目
21-4	縄文	突帯文 深鉢		石英、長石粒を少々含む	やや軟	外 褐色 内 黄褐色～細灰褐色	外 風化 内 風化	削目
21-5	縄文	突帯文 深鉢		石英、長石粒を少々含む	やや軟	外 黄褐色～黑色 内 黄褐色	外 風化 内 風化	
21-6	縄文	突帯文 深鉢	口径(18.0)	石英、長石粒を多く含む	良	外 に赤・褐色 内 に赤・褐色	外 ケズリ施ミガキ、稍の直跡 内 ナデ	
21-7	縄文	突帯文 深鉢	口径(24.6)	石英、長石粒を少々含む	良	外 浅黄色～細灰褐色 内 浅黄色～赤・黃褐色	外 ナデ 内 ナデ	
21-8	縄文	鉢		石英、長石粒を少々含む	良	外 黄褐色～褐色 内 黄褐色	外 ケズリ施ナデ 内 ナデ	
21-9	縄文	鉢か		石英、長石粒を少々含む	良好	外 細灰色～黒褐色 内 に赤・黃褐色～黒褐色	外 風化物付着のため調整不明 内 ナデ	
21-10	縄文	突帯文 深鉢		石英、長石を多く含む	やや軟	外 オリーブ褐色 内 淡褐色	外 熱熱で剥離のため調整不明 内 ナデ	
21-11	縄文	(瓶部)	底径(9.0)	石英、長石粒を多く含む	やや軟	外 淡褐色 内 淡褐色	外 ナデ 内 ナデ	
21-12	縄文	(瓶部)	底径(9.0)	石英、長石粒を多く含む	やや軟	外 淡黄色～黃褐色 内 に赤・黃褐色～黃褐色	外 風化 内 風化	
21-13	縄文	浅鉢	底径(5.8)	石英、長石粒を少々含む	良	外 淡黄色～黒褐色 内 淡黄色～黑褐色	外 ナデ 内 ナデ	

石製品

辨認番号	種類	法 量 (cm・g)	石 材	備 考
11-4	石斧	幅 10.5 最大幅 6.5 前厚 1.2 重量 121.10	安山岩	表面は軽く研磨されている 刃部は両面から研磨されている
20-1	石器	残存長 2.0 最大幅 1.6 最大厚 0.3 重量 0.73	黒曜石	
20-2	石器	長さ 1.9 最大幅 1.4 最大厚 0.2 重量 0.63	黒曜石	
20-3	石器	残存長 1.0 最大幅 1.0 最大厚 0.4 重量 0.28	黒曜石	表面は研磨されており挫痕が残る
20-4	石器	長さ 2.2 最大幅 1.4 最大厚 0.35 重量 1.02	黒曜石	
20-5	石器	長さ 2.7 最大幅 1.9 最大厚 0.45 重量 1.63	安山岩	
20-6	石器	長さ 1.7 最大幅 1.2 最大厚 0.2 重量 0.54	安山岩	
20-7	骨玉	長さ 1.1 直径 0.6 孔径 0.2 重量 0.18	緑色輝灰岩	
22-1	鉋石	幅 13.8 最大幅 6.4 前大厚 3.8 重量 404.54		
22-2	石器	残存長 17.3 両面部最大幅 10.4 基部幅 5.8 最大厚 2.1 重量 508.69		刃部の使用痕著しい(摩耗)
22-3	石皿	全長 16.4 最大幅 15.1 最大厚 3.7 重量 1700		使用痕あり
22-4	石器	幅 4.0 横 5.3 最大厚 0.8 重量 22.25		自然円錐 2カ所の抉りがあり、2カ所とも両面打痕
22-5	石器	幅 4.9 横 7.9 最大厚 1.5 重量 73.67		自然円錐 2カ所の抉りがあり、1カ所両面打痕。もう1カ所は片面打痕

動物遺存体(図版7上)

辨認番号	分類群	科	種名	部位	部分	数量	備 考
1	哺乳類	シカ科	ニホンジカ	鹿角		1	
2	哺乳類	シカ科	ニホンジカ	逆鱗歯	子骨歯	5	
3	哺乳類	シカ科またはイノシシ科	ニホンジカ または イノシシ		四肢骨か	3枚(F(3色))	
4	哺乳類?		不明	不明		1	抜け(1色)
5	哺乳類		不明	逆鱗歯	歯根	3	抜け(3色)うち1点は焼けてない 中・小型哺乳類
6	哺乳類		不明	椎骨		1	抜け(3色) 中・小型哺乳類(イタチテン程度の大きさ)
7	哺乳類		不明	中手骨または中足骨	近位	1	抜け(3色) 中足骨か
8	哺乳類		不明	易断骨または中脚骨		2	抜け(3色) 中・小型哺乳類(イタチテン程度の大きさ)
9	鳥類		不明	椎骨	遠位	1	抜け(3色) 鳥類(ホシより小さい)
10	哺乳類		不明	椎骨		1	抜け(3色) 中・小型哺乳類(イタチテン程度の大きさ)
11	硬骨魚類	タイ科	ヘダイ	逆鱗歯	臼歯	1	30 ~ 40cm大
12	硬骨魚類	タイ科	不明	前上顎骨/歯骨		1	抜け(F(3色))
13	硬骨魚類		不明	椎骨			又抜け(F(3色)、黒色)
14	硬骨魚類		不明	棘			複数 銀け、鋸片

写真図版





調査地遠景（南東から）



調査地全景（調査前）（北東から）

図版 2



完掘状況（南から）



完掘状況（南西から）



南壁セクション東半分（北から）



南壁セクション西半分（北から）

図版 4



NR03 検出状況（北東から）



NR03 土層状況（北から）

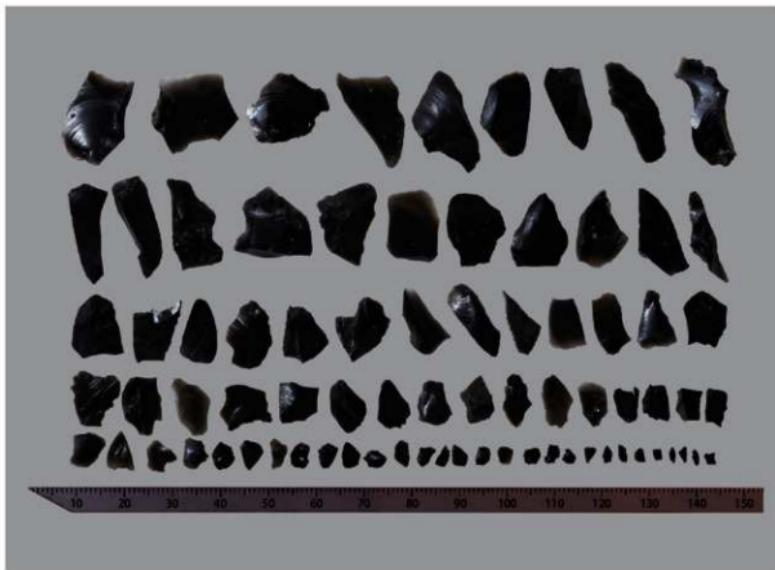


NR03 土層断面（北から）



NR03 遺物出土状況（第 13 図 11）（北から）

図版 6



珪から出土した黒曜石の剥片（一部）

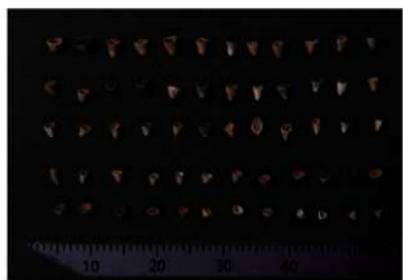


珪から出土した安山岩の剥片（一部）

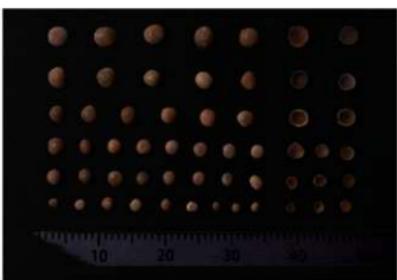
図版 7



動物遺存体

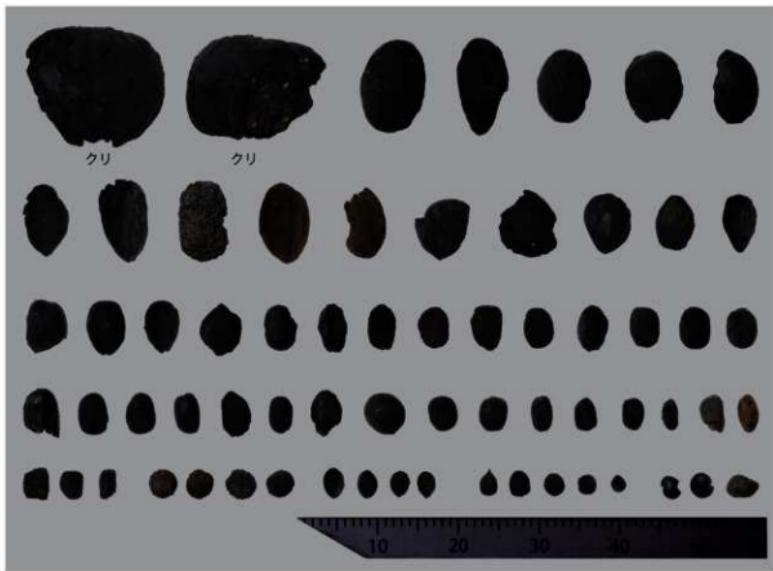


動物遺存体（タイ科の歯）

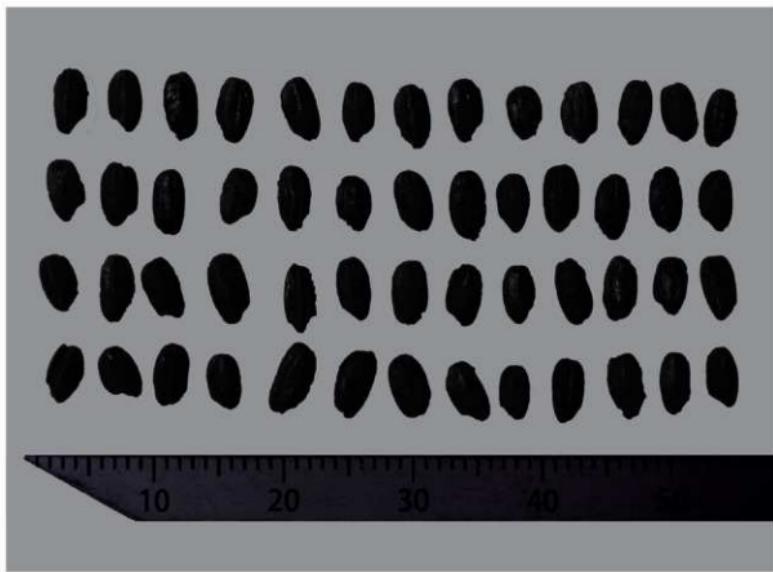


動物遺存体（タイ科の歯（臼歯））

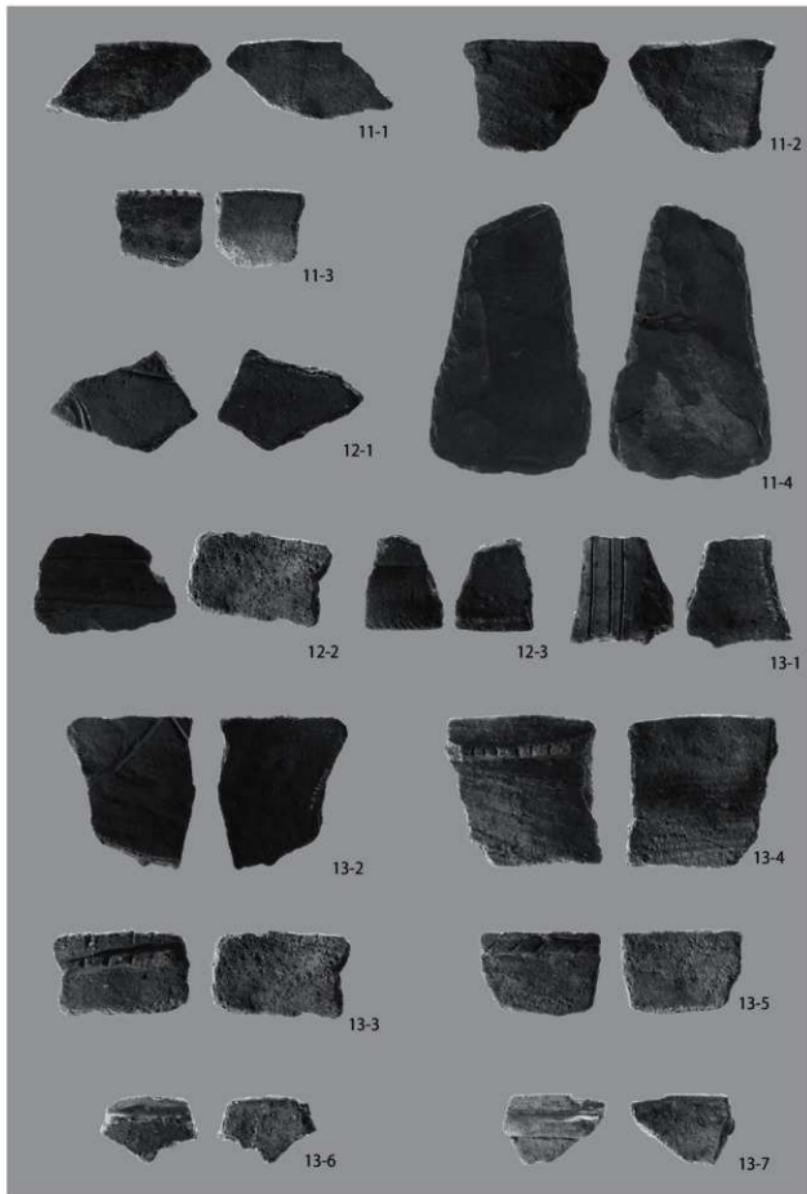
図版 8



植物遺存体



炭化米



出土遺物 ①

図版 10



13-8



13-9



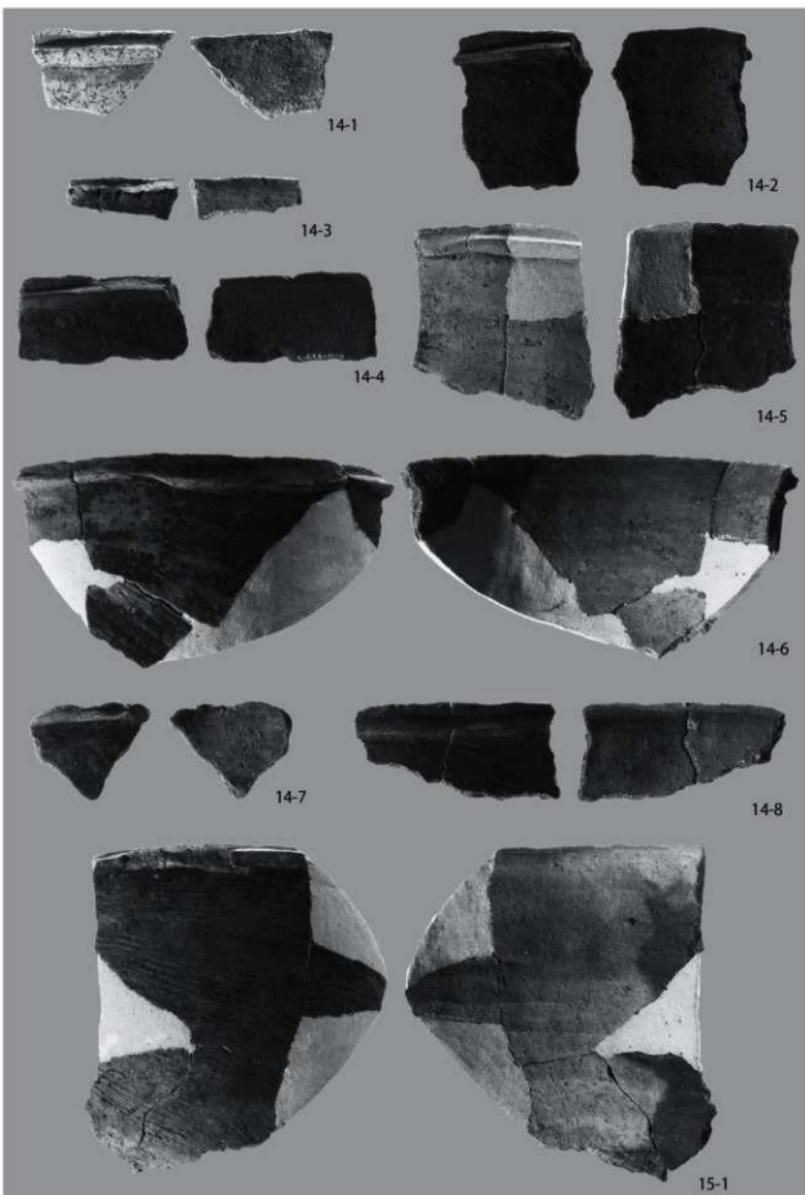
13-10



13-11

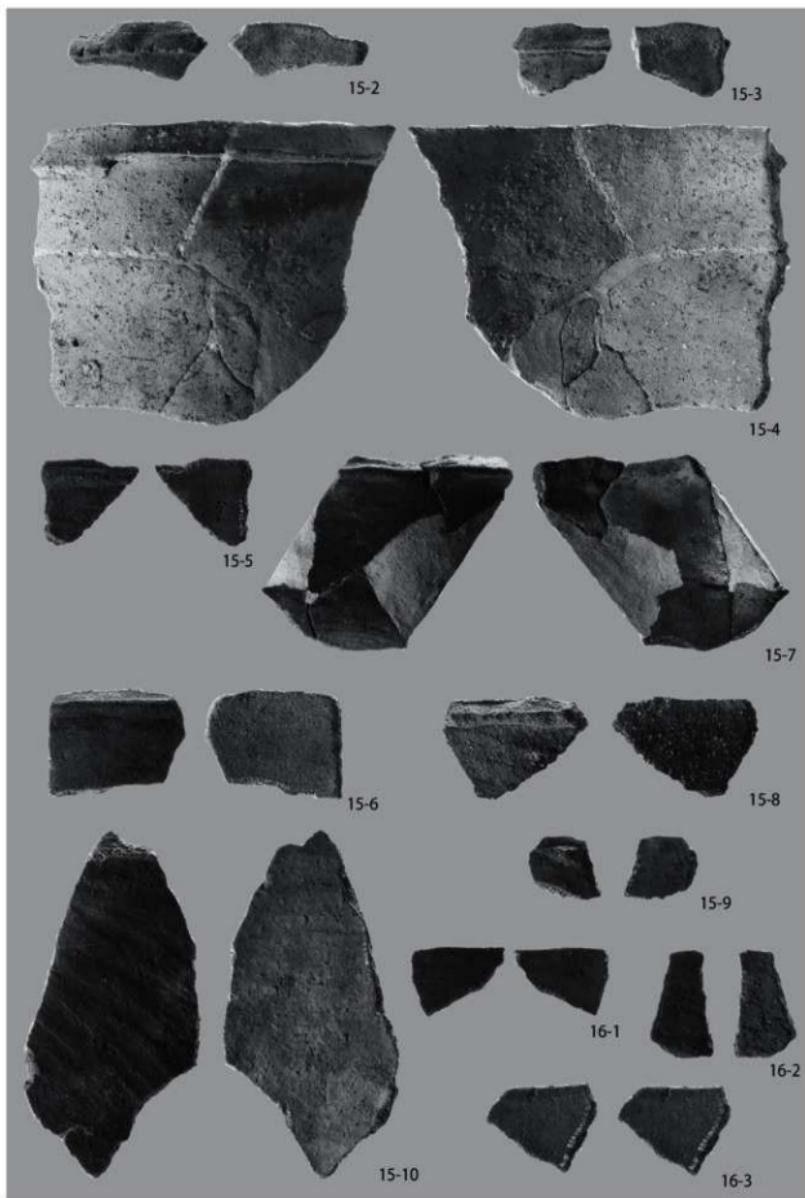
出土遺物 ②

図版 11



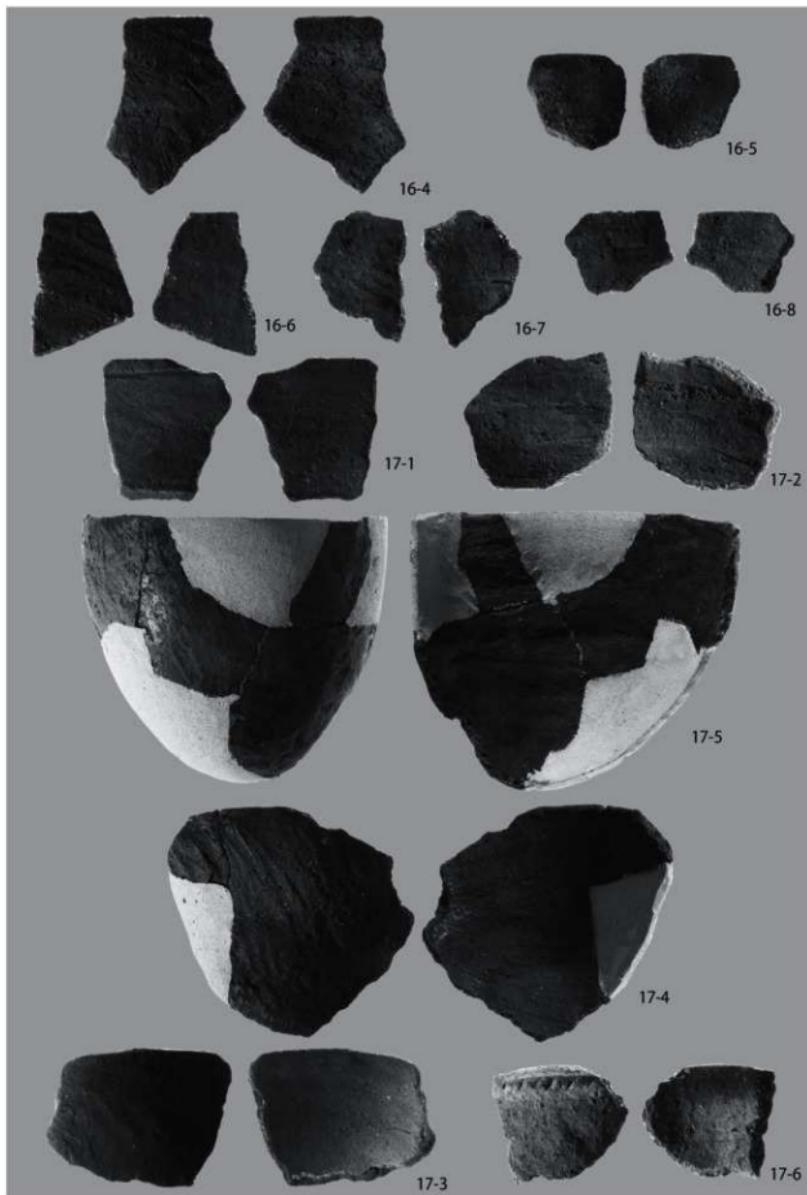
出土遺物 ③

図版 12



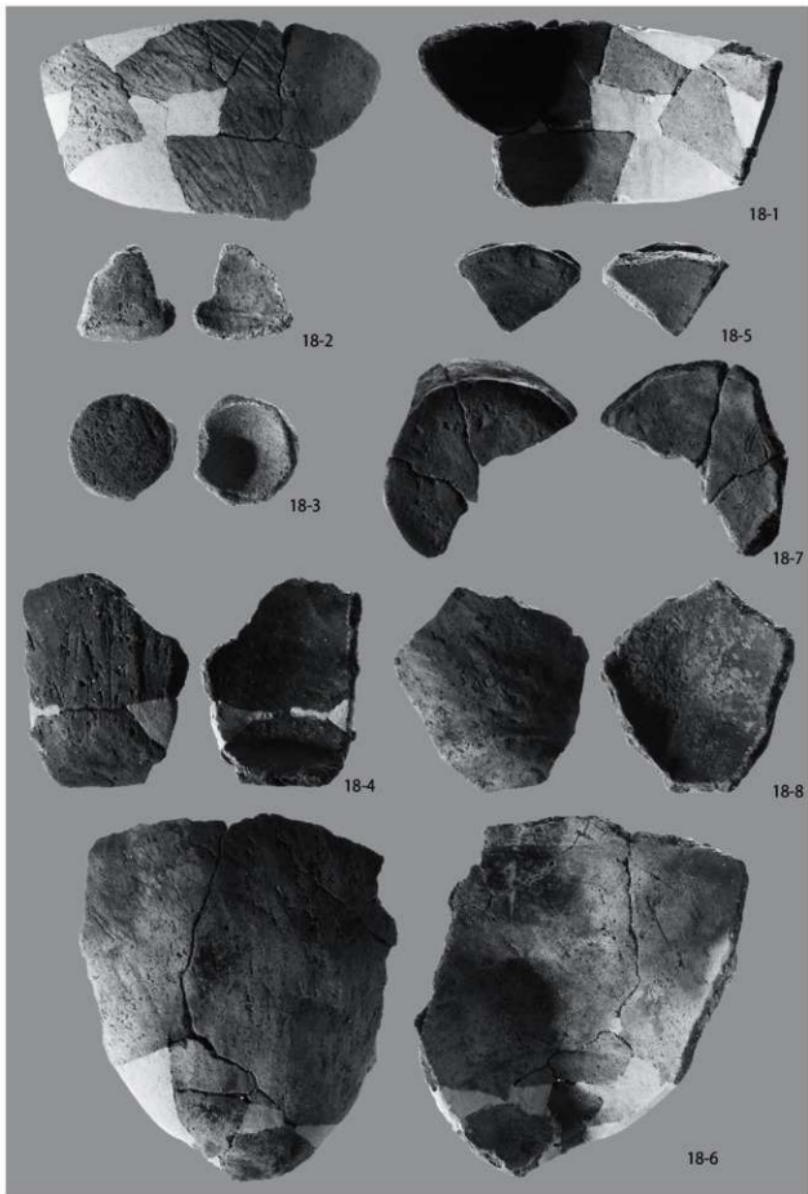
出土遺物 ④

図版 13

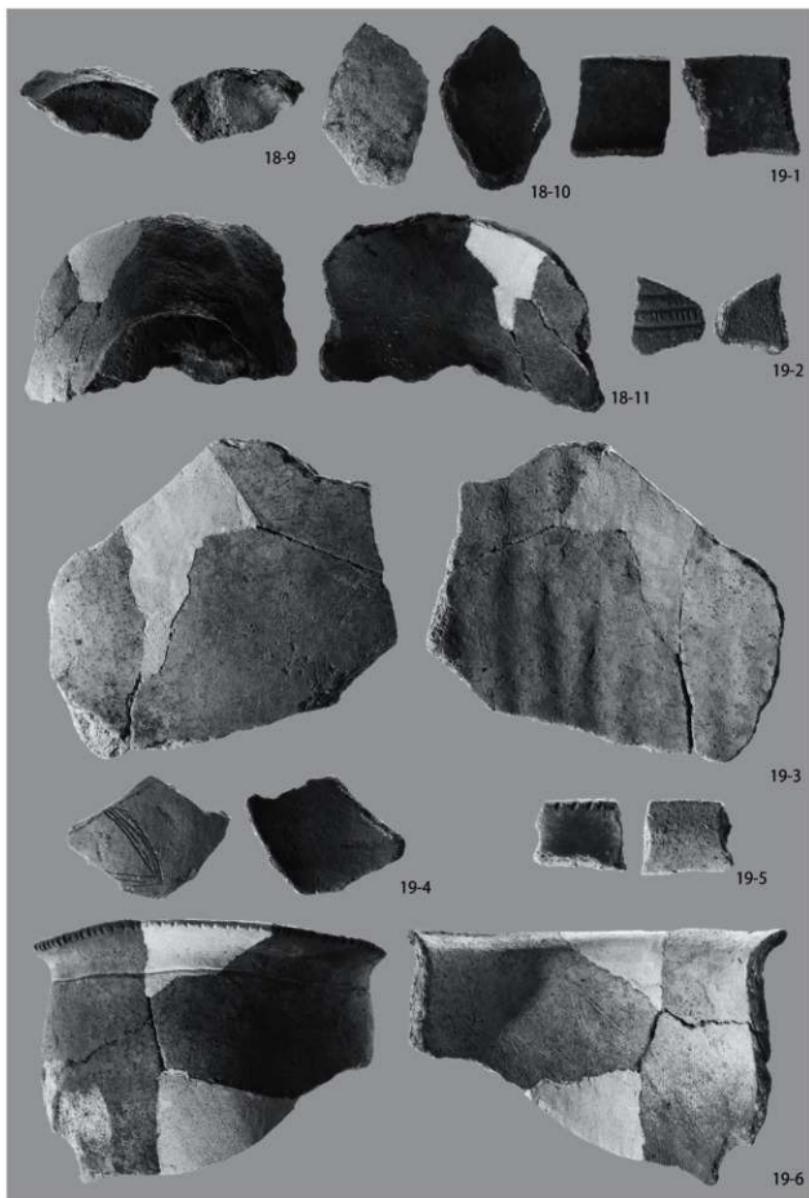


出土遺物 ⑤

図版 14

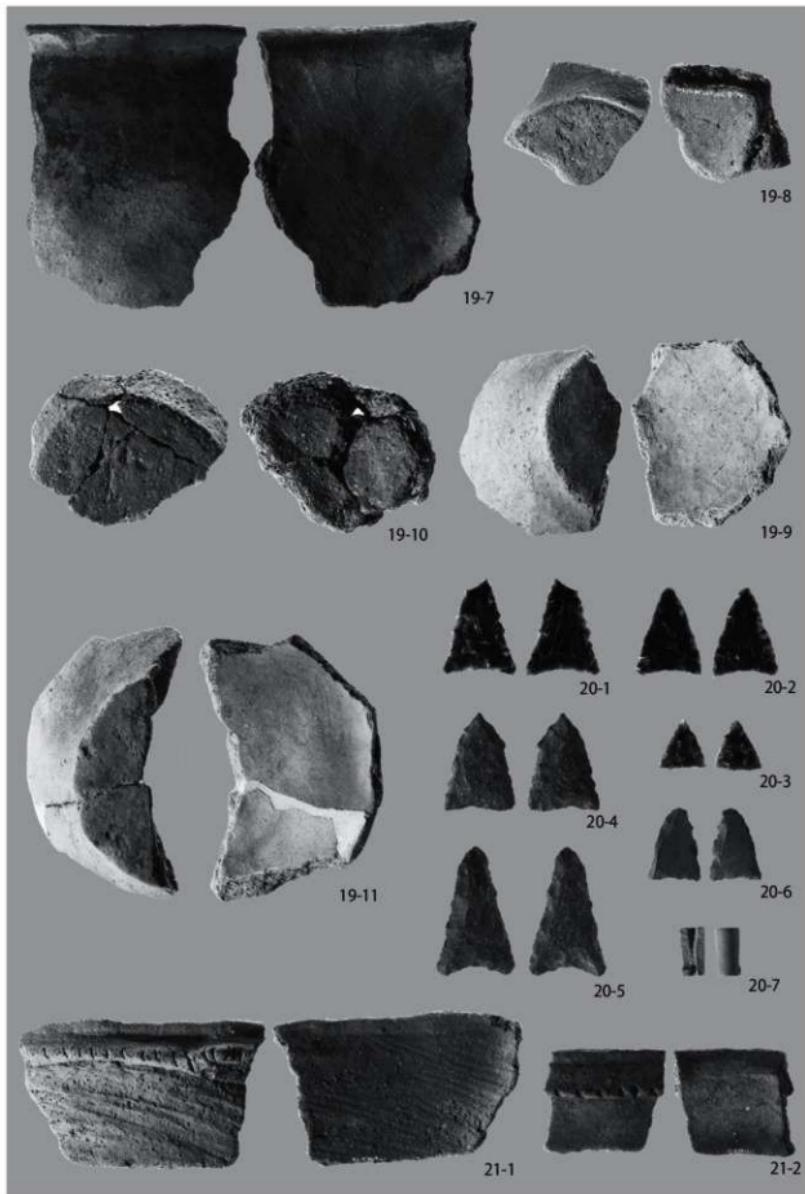


出土遺物 ⑥

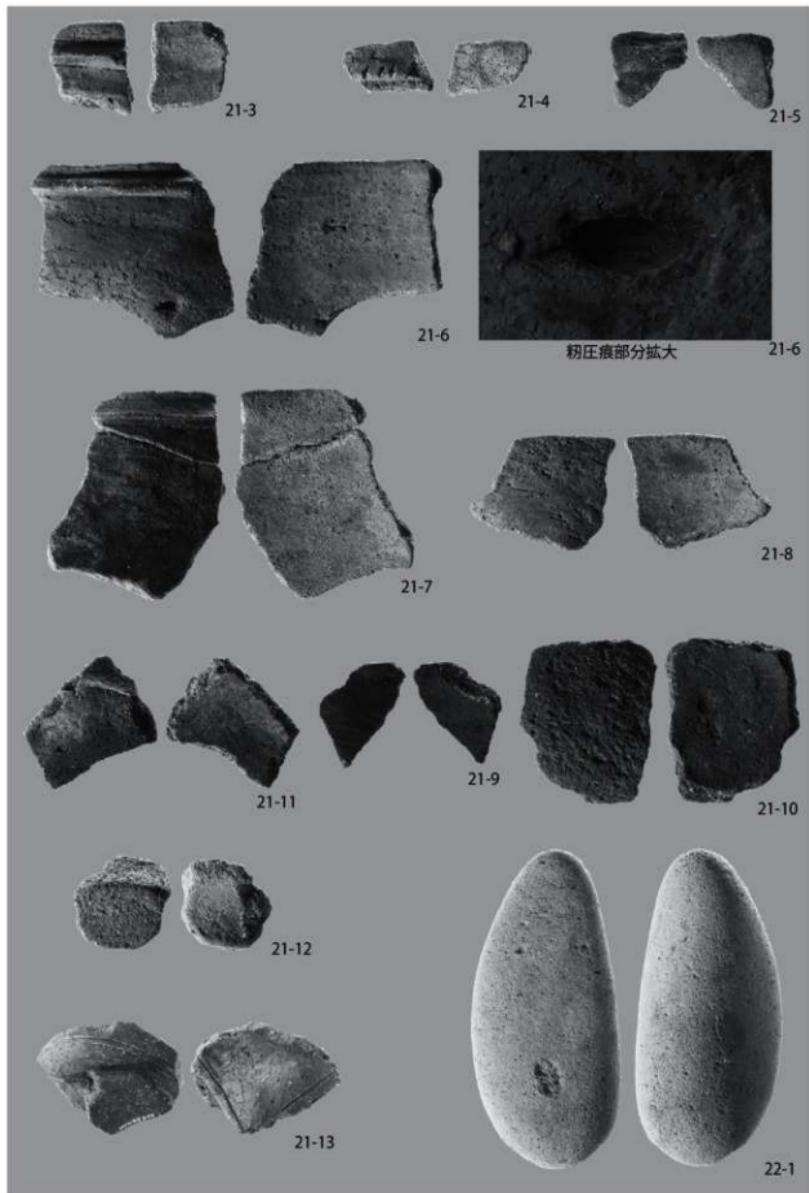


出土遺物 ⑦

図版 16

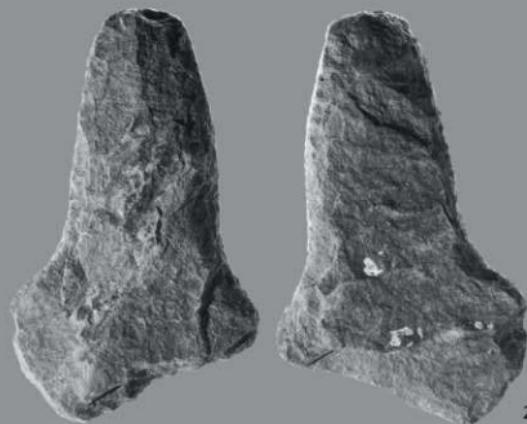


出土遺物 ⑧

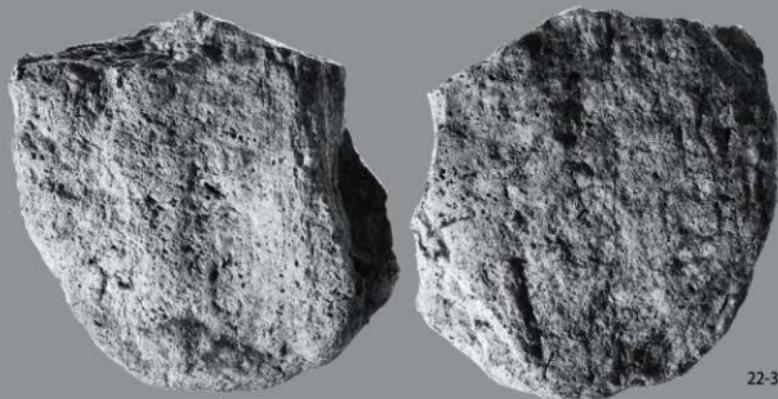


出土遺物 ⑨

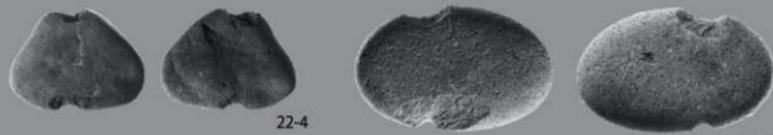
図版 18



22-2



22-3



22-4

22-5

出土遺物 ⑯

報告書抄録

ふりがな	ふくとみまつのまえいせき						
書名	福富松ノ前遺跡						
副書名	市道福富10号線外2線道路改良工事に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第194集						
編著者名	江川幸子						
編集機関	松江市 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL:0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 (埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL:0852-85-9210						
発行年月日	2020年3月						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
福富松ノ前遺跡	しまねけん 島根県 松江市 福富町 211-3外 3筆	32201	D-1184	35°45'23"	20180305 ~ 20180314	110.2m ²	道路建設
				133°11'59"			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
福富松ノ前遺跡	包含層	縄文 弥生	流路	縄文土器 弥生土器 石製品	土石流及び流路より縄文後期～弥生前期の土器が出土した。また、炭化米や動植物遺存体、石器製作に関わると思われる黒曜石や安山岩の剥片なども多数出土した。 突帯文土器から遠賀川式土器への移行期の段階のものと考えられる。		

松江市文化財調査報告書 第194集
市道福富10号線外2線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

福富松ノ前遺跡

令和2（2020）年3月

発行 島根県松江市

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團

印刷 有限会社 松陽印刷所

島根県松江市学園南2-3-11